TOTO 通信

2018年 夏号

Toward a Creative Architectural Scene

特集／移築のすすめ

Special Feature / Hints for Relocating

築のすすめ

想い入れのある建物を残したいと思っても、
その土地での開発計画など、
時には同じ場所では残せない事情がある。
そんなとき、やむをえず建物をこわす以外にも、
検討したいのが、「移築」という道。
木造は、一度解体しても、
また別の場所で組み立てることができるため、
昔から日本では、移築が行われてきた。
それは今でも実践されており、
さまざまな記憶や技術の継承に役立っている。
既存の建物を生かすことが求められる時代だからこそ、
忘れられかけている「移築」という選択肢を見直したい。
新しい手法にも注目し、
現代における「移築」の可能性を考える。

白井晟一が設計した「顧空庵」(1953)の和室。2007年に東京から秋田に移築されたもの(写真／藤塚光政)。

白井原太+渡邊隆+小倉英世 4

設計／大角雄三 10

設計／能作文徳+能作淳平 18

設計／伊藤 暁 26

設計／増田啓介+増田良子 34

シリーズ

旅のバスルーム105 文・スケッチ／浦 一也 ラ・シエスタ(ベトナム・ハノイ) 42

現代住宅併走41 文／藤森照信「土浦亀城邸」 設計／土浦亀城 44

最新水まわり物語47 東京ミッドタウン日比谷 50

地域に生きる会社76 ミヤウチ建設 54

新商品開発物語 システムバスルーム SYNLA(シンラ) 56

TOTOギャラリー・間で展覧会をします 藤村龍至展 ちのかたち 建築的思考のプロトタイプとその応用 60

News File TOTO News, Cera Trading News, Books 62

表紙／「玄孫」の外観。 表紙撮影／藤塚光政
編集制作／伏見編集室
デザイン／岡本一宣デザイン事務所 印刷／ゼネラルアサヒ

特集 移

Special Feature / Hints for Relocating

TOTO
通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 519
Summer 2018

インタビュー	白井晟一の「顧空庵」移築録	
ケーススタディ1	ビルの狭間にたたずむ古い蔵	「玄孫」
ケーススタディ2	瓦屋根を、クレーンで移設	「高岡のゲストハウス」
ケーススタディ3	時の厚みを感じる、モノの集まり	「筑西の住宅」
ケーススタディ4	移築、曳家、新築の組み合わせ	「石神の家」

『TOTO通信』を
インターネットで
ご覧いただけます。 → https://jp.toto.com/tsushin

特集／移築のすすめ

インタビュー

白井晟一の「顧空庵」移築録

Special Feature
Hints for Relocating

東京都世田谷区上野毛にあった白井晟一設計の「試作小住宅」（1953）が、2007年、秋田県湯沢市に移築され、「顧空庵」という名のゲストハウスに生まれ変わった。その移築の設計を担ったのは、孫・白井原太さん。そして、移築の肝となる解体を行ったのが、文化財の移築に慣れた風基建設だった。白井さん、そして風基建設代表の渡邊隆さんと担当者の小倉英世さんに、当時の経験とともに移築の可能性について話を聞いた。

移築の設計者
白井原太
白井晟一建築研究所

＋

解体した人
渡邊隆
風基建設・代表

＋

解体した人
小倉英世
風基建設・「顧空庵」担当の現場監督

司会・まとめ／伏見唯
写真／藤塚光政（顧空庵）
山内秀鬼（ポートレイト）

移築後の「顧空庵」のテラス。庭に面している。

Shirai Genta

Watanabe Takashi

Ogura Hideyo

東京から湯沢に移築された小住宅

――「顧空庵」は、秋田県の湯沢において江戸時代から代々医師であった渡部家の子どもたちが、上京して学生時代を過ごすため、東京都の上野毛に建てられた小住宅です。１９５３年、湯沢と縁のあった白井晟一の設計により、つくられました。

それが10年ほど前に、湯沢に移築されることになったわけですが、どういう経緯だったのでしょうか。

白井　湯沢の医師・渡部三喜先生から、依頼がありました。もともとこの住宅は、渡部先生のご両親が、祖父（白井晟一）とつくった住宅なのですが、先生のお母さまが２００４年に亡くなられたのをきっかけとして、渡部家の親族会議でどうしても手放さなければならない、という話になったのだそうです。

――「顧空庵」が立っていた上野毛は高級住宅地ですから、土地の値段が高く、当然売却する話も出てきますよね。

白井　ただ、築50年以上の住宅ですから、残念ながら普通に売却したら、おそらくこわされてしまいます。そこで、完全にこわすのはしのびない、ということで、06年に渡部先生から相談を受けました。

最初は、この住宅をこわさずに住み継いでくれる人を探したのですが、見つかりませんでした。先生は一度はあきらめて、こわすつもりでいたのですが、最後に別れの１泊をしたところ、ご両親のことや学生時代のことを思い出され、なんとか部分的にでも残したい、と決意されました。

――それで、移築という道を選んだのですか。

白井　最初は、建具などの一部を残せないか、というくらいの話でした。ただ、この住宅は、今も僕たちが使っている白井晟一建築研究所の事務所「アトリエＮｏ・５」（１９５２）と同時期の仕事でして、素材やディテールに共通するところがあり、僕自身も想い入れが強くなっていったんです。それで、できる限り残したいという話になり、ちょうど湯沢に場所があるとのことで、移築することになりました。

文化財に慣れた風基建設との協働

――いよいよ、移築のチームづくり。

白井　渡部先生には、地元のいろいろな職人とのつながりがありましたから、その職人たちに声をかけ、見積もりをとっていました。一方、僕は知り合いの松井郁夫さん（木組の家づくりを得意とする建築家）に移築に慣れた風基建設さんを紹介していただいていました。

その結果、東京での解体を風基さんが行い、湯沢での組立てを、渡部先生の発注で地元の職人集団が担うことになったのです。

――風基建設は、故・田中文男棟梁が率いた真木建設の後継にあたる会社です。渡邊さんは田中棟梁の頃から、新築だけでなく、社寺や文化財の修理現場の設計や監督をしてきましたが、移築も手がけてきたのでしょうか。

渡邊　文化財の社寺や民家など、大工の設計施工でつくられた建物の移築を手がけることはあります。この住宅は、建築家とのコラボレーションによるものづくりという点に興味がありました。今までの仕事とは異なるパターンで、おもしろそうだと思ったのです。

小倉　過去にも、既存建築の解体と材料の運搬だけの仕事を手がけたことがありました。メインの作業が2週間くらいで終わる短期間の仕事なんです。

――解体や運搬だけを手がけるという、分業のメリットはなんでしょうか。

小倉　後々のメンテナンスのことを考えると、組立ては、移築先の職人に任せるのがベストだと思います。ただ、材料のことは実際に解体した人がよくわかっていますから、同じ人が組み立てたほうがよいのでしょうが、今回は組み立てる大工は決まっていたんですよね。

白井　決まっていました。そこに、僕は少し不安がありました。移築は、初めての経験でしたから。解体した人と組み立てる人が異なるときに、はたしてうまくバトンタッチできるのだろうか。ただ、ふたを開けてみると、解体後の材料が風基さんによって非常にわかりやすく整理されていて、スムーズに引き継ぎができました。

組み立てやすいように解体部材を整理しておく

――どのように整理したのでしょうか。

小倉　まず、白井（晟一）さんが描いた当時の図面のコピーをもとに実測調査をして、現状の図面を描きます。スケッチを描いて、CAD化しました。元の図面では細かいところまでは描かれていないので、補完をする必要がありました。その図面をもとにして、部材表もつくります。部材表を見れば、材料が全部で何本あるか、わかるようにしておくんです。

写真提供／白井晟一建築研究所

原設計者

白井晟一

Shirai Genta & Shirai Seiichi

――それぞれの部材が、図面と照合できるように番付もつけるのですか。

小倉　解体番付をつけます。ただ、新築のときのように材料に墨書きするのではなく、番付札を釘で打ちつけます。部材が汚れているので、墨で番付を書くことができないんですよ。

――図面と部材表があって、実際の材料には番付がついている。

渡邊　建物をつくるとき、今は部材の数量を出して積算しないといけません。そのとき、図面と構成部材の数量がわかる部材表が大事になるんです。ここに、各部材の煩雑な情報を盛り込むことができるし、新しい材料や、補修しなければいけない材料の数量もわかります。部材表がないと、次のステップにいけないんです。

白井　僕自身も、写真や図面で元の状態を記録していましたが、風基さんの整理によって、うまくバトンタッチができたのだと思います。風基さんと現地の職人が直接話す機会はありませんでしたが、問題なく、仕事が進みました。

――整理しているあいだ、部材はどこにあったのでしょうか。

小倉　千葉県流山市にある風基建設の工場に移して、整理をしました。そこで、材料の掃除や既存の釘を抜いたりします。運搬中にどんどん傷がついてしまいますから、移築の際、釘は必ず抜きます。また、抜いておかないと、施工するときに鑿（のみ）が釘に引っかかって、どんどん欠けてしまうんです。

白井　現地の大工の道具を悪くしないように、という配慮なんですね。

渡邊　古い時代の建物ほど、釘が少ないので解体しやすい。明治時代以降になってくると、どうしても釘が多くなってきます。継手・仕口だけでつくられた建物のほうが簡単です。取りはずせるようになっているから、あっという間に解体できてしまいます。釘の処理は、最近建てられた木造を移築する際の注意点です。

祖父が設計した建築の素材やディテールを知り、できる限り残したいと思いました。

Shirai Genta

白井原太／1973年東京都生まれ。97年多摩美術大学美術学部建築学科卒業。設計事務所勤務を経て、2000年より白井晟一建築研究所。

移築後の「顧空庵」の外観。白井晟一は、白い漆喰壁とくすんだ木部との階調を好んだ。

しらい・せいいち／1905年京都府生まれ。28年京都高等工芸学校建築科卒業後、ハイデルベルク大学、ベルリン大学で哲学などを学ぶ。60年ヨーロッパを巡り、大きな影響を受ける。83年逝去。おもな作品＝「浅草善照寺本堂」（58）、「虚白庵」（70）、「親和銀行本店懐霄館」（75）。

すべての部材を現地に運ぶ

——移築の際に、すべての材料を転用できるわけではないと思いますが、「顧空庵」ではどのくらい再利用できたのでしょうか。

白井　何をどう残すのか、最初は漠然としていました。そこで渡部先生と相談して、各部材を書き出した表に、保存したい希望をまとめていきました。「◎」は最優先、「○」は優先、「△」は状況次第、「×」は不要、というように。たとえば、柱や破風板などの見える部材は「◎」、間柱や根太などの見えない部材は「○」、構造金物は「△」、設備機器は「×」。この情報を先生とともに、現地の棟梁とも共有しました。状態はよかったので、希望の部材はほとんど再利用できています。

——風基建設の側でも、再利用できるかどうかを判断したのでしょうか。

小倉　基本的に木部に関しては、全部の材料を現地に運んでいます。一般的には、見えない場所に使う野物（のもの）材は、移築の際に更新することが多いのですが、このときは野物材も持っていっています。

白井　壁下地の木摺りも、パネル状にはずして持っていきました。結局、木摺りは使いませんでしたが、新しくつくるときの参考になりました。

小倉　再利用するかどうかは現地判断に任せ、とりあえず全部運ぶのが、僕らの仕事でした。

白井　13・5t積みのトラックを満載にして、1台で運びました。

——1台ですか。住宅の規模だと、そのくらいの量なのですか。

小倉　平屋の小住宅ですからね。

——木部だけでなく、土壁の土まで再利用されていますよね。

白井　内部の土壁を解体時にかき落として再利用しています。ただ最初は、その土と混ぜる骨材の砂を現地で調達したのですが、オリジナルのくすんだ渋さは出ずに、すごく明るい色になってしまったんです。砂は東京から送ると大変なので、現地調達しようとしましたが、うまくいかなかったのです。もともと上野毛で使われていたのは、どうやら関東の利根川あたりの砂だとわかったので、急遽、利根川の砂を使って、風合いを再現しました。

渡邊　関東では、粘土質の土の中塗りで終わらせることが多く、関西のように、色土を最後の仕上げにすることは少ないんですよ。だから天然の土の色が、そのまま壁の色に出ます。天然の色ですから、いつも同じ色になるわけではありません。

小倉　文化財の現場ですら、中塗り仕上げの色を完全再現するということは求められません。

渡邊　土の色のままだから、意図的に再現することは難しい。ただ一方で、京土壁だと、産地も色も再現するんです。

なじませるか差別化するか

——そういった再利用を進める一方で、更新したところもありますか。

白井　文化財の保存ではありませんから、必要なところは更新していく、という方針でした。もちろん基礎は打ち直していますし、屋根の板金や設備機器も新しくしています。

それと、積雪地帯に持っていくわけですから、屋根まわりの部材も更新しています。たとえば野地板もいたんではいませんでしたが、透いているところもあったので使っていません。代わりに、木摺りの下地に転用しています。

小倉　屋根まわりといえば、桁の端部が細くなっていて、軒が薄くできている。

日本の木造建築は、継手・仕口で接合され、解体しやすくできている。

Watanabe Takashi

渡邊隆／1953年新潟県生まれ。72〜76年芝浦工業大学建築史研究室にて、木曽路の奈良井宿の町並み調査にかかわる。76年大工棟梁・田中文男が率いる真木建設に入社。91年真木建設代表。99年真木建設清算に伴い、風基建設設立。

ますよね。

渡邊　最初に見たとき、まっさきに驚いたところです。軒の出が深いけれども、移築したら雪で折れてしまうのではないかと心配でした。

白井　この桁は、材料を取りかえるわけにはいかないので、積雪加重がかからないように、融雪シートを軒先に入れました。後は、人為的な雪下ろしを徹底するしかありません。垂木などの部材を太くすることも検討しましたが、渡部先生と「オリジナルを残す」と判断しました。

――水まわりのところを、少し増築していますね。

白井　元は、台所から直接浴室に入るプランだったので、脱衣室を設けています。一緒に台所も広くしています。このときは、台所の継ぎ足し部分を既存部分の色と揃えたりして、増築を感じさせない増築を目指しました。

当然床も増えるのですが、アピトンという当時と同じ材料を用いています。この住宅は、構造材が杉、造作がラワン、床がアピトンとほとんど材料が統一されているんです。

――「顧空庵」は増築したところが既存部となじむようにしていますが、文化財の修理や移築だと、新しいものを意識的に差別化することもあります。

小倉　どこを修理したのかが、わかるようにしてあるんです。今よりも新しい技術や思想が出てきたときに、オリジナルの部分がわかるから、後の人が更新しやすい。だから、木造を鉄骨で補強することもある。

渡邊　ほとんど言い訳です。鉄骨にするときの。なじませなくてもいいけれど、もっと融合したデザインを考えてほしい、という気持ちにはなります。そのあたりは、センスが問われますね。

なぜ移築するのか

――「顧空庵」は白井晟一が設計した建築ということもあり、特殊なケースかと思いますが、移築をしたのはなぜでしょうか。

白井　祖父が設計した建築ということだけでなく、渡部先生にとっては家族の歴史として、かけがえのないものです。先生は、先祖の系譜を書籍にまとめるなど、家を重んじている方なので、ご両親がつくり、一家が長年過ごしてきた思い出を大切にされてきたんです。そういう想いがあったから、古い建物を再利用する苦労をのりこえることができたのだと思います。

部材を解体した後、
整理して
おくことで、
現地で組み立て
やすくなります。

Ogura Hideyo

小倉英世／1967年埼玉県生まれ。91年千葉工業大学工学部建築学科卒業。93年芝浦工業大学大学院理工学研究科建設工学科修了。国内外の集落調査を経験。設計事務所勤務を経て、96年真木建設に入社。現在、風基建設勤務。

小倉　一般的に古民家を好きな人が増えていますね。古民家の共有バンクなどで、民家を譲りたい人と譲り受けたい人をマッチングさせて、移築が行われることが、よくあるかと思います。

――風基建設では、文化財以外にはどのような移築を担ってきましたか。

渡邊　たとえば、建主のふるさとの山梨から、現在の住まいがある横浜に民家を持ってきたりとか。やはりこれも、その方のふるさとへの想いがあって、残したいということでしたね。

後は、裏千家出入りの数寄屋大工・木村清兵衛がつくった茶室。いつか移築しようということで解体したのですが、材料がまだ倉庫に収納されたまま、という仕事もあります。

小倉　一緒に立っていた待合は小さいから、クレーンでそのまま吊り上げて、トラックにのせて、倉庫まで運びました。まだ倉庫にあるので、いつか日の目を見るとよいのですが。

――茶室のような名物は、昔から移築されてきましたよね。

渡邊　茶室はプレミアがつきやすい。とくに「如庵」（1618）が有名ですね。京都の建仁寺、東京の三井家本邸、神奈川の大磯別荘、そして今は愛知の犬山ホテルの敷地内に移築されています。

白井　強い想い入れがある場合、あるいは民家や茶室などにひかれている場合がほとんどだと思うのですが、移築が、もう少し一般的な選択肢にならないかと思っています。

移築のハードルはそれほど高くない

――移築が一般的な選択肢になっていないのは、なぜでしょうか。

渡邊　一番は、お金がかかるということでしょう。解体費と運搬費が余計にかかるわけですから。

白井　特別価格にしていただいた、ということもあるかもしれませんが、「顧空庵」での風基さんの仕事なら、解体と運搬とで、おおよそ新築の総工費の2〜3割くらい。部材のほとんどを再利用することができました。移築は、新築の2倍というようなイメージがあるなかで、それほど高いハードルだとは感じませんでした。しかも、職人が減っているとはいえ、まだ風基さんのような丁寧な仕事ができる人たちがいるなかで、コストだけで敬遠されているとしたら、すごくもったいないことだと思うんです。

渡邊　昔、住宅展示のために、1カ月の工期で住宅を建てたことがありました。その新築の工費が2000万円でした。その後、それを解体して別の場所に移築したのですが、そのときの工費が1200万円。軸部は、そのまま転用して、漆喰を塗り直し、屋根材を変えました。新築より安くできたんです。

小倉　運搬費と解体費も込みで、6割ですよ。

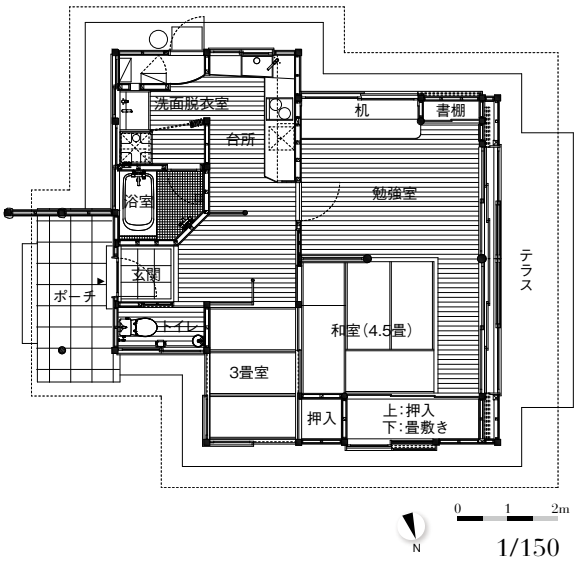
渡邊　移築するのは最初からわかっていたので、当然、移築しやすいように組みました。床板もパネルにしました。

——同じ人が新築と移築を担うのは特殊な事例かもしれませんが、新築時に移築を想定しておく、というのは、ひとつのノウハウですね。

渡邊　あまり考えられていないことですが、可能性はあると思います。ただ、特別なことをする必要はなくて、真壁の木造なら、自然と解体しやすい構造になっていきます。日本の木組は、本来はそういうシステムでできているんですから。

白井　移築は現実的に不可能なものではないのに、ハードルが高いという認識ばかりが広がっているような気がしています。だから、ノウハウとともに、移築を選択肢に入れる感覚が育っていってほしいですね。想い入れのある建物を残したいという感情は、特殊なものではなく、多くの人が抱くものだと思います。

顧空庵　移築後の平面図



移築のプロセス

東京から秋田へ トラック1台分の材料を 運んでいく

4　1軒分の部材をトラック1台に搭載。

1　東京都世田谷区上野毛にあった頃の外観。

5　秋田県湯沢市の倉庫に保管された解体部材。

2　軸部が露わになった解体中の様子。

6　現地で組み立てられている様子。

3　解体した部材を、トラックにのせていく。

写真6点、提供／白井晟一建築研究所

ビルの狭間にたたずむ古い蔵

作品	玄孫	設計	大角雄三

東側外観。白い漆喰塗りの部分が既存の蔵。左手の南側に庇を伸ばしてテラス席にしている。

仙台駅からほど近い、
ビルの谷間にたたずんでいる古い蔵。
まるで昔から立ちつづけてきたように見えるが、
山形県鶴岡市の蔵を移築再生して、
新しくつくられた居酒屋だ。

取材・文／杉前政樹　写真／藤塚光政

仙台市青葉区本町。地下鉄の広瀬通駅を降りて徒歩1分。仙台駅からでも十数分で歩けるほどの距離に、その移築された蔵は立っている。確かに交通の便はよい場所なのだろうが、周囲は老朽化したビルやコインパーキングが目立ち、向かいでは創業100年を超える老舗家具店が閉店セールを行っていた。居酒屋「玄孫」は、そんな都心の谷間に、真新しい蔵がタイムスリップして突然現れたかのような外観である。

設計者は岡山で30年にわたって活動する「古民家再生工房」のベテラン建築家のひとり、大角雄三さん。蔵は山形県鶴岡市から移築再生された築約160年のもの。そして建主はここ本町で3軒の居酒屋を15年以上にわたって経営する石山靖さん。地域も年代もバラバラな三者はいかにしてつながり、この「都心の奇跡」のような居酒屋が生まれるに至ったのだろうか。

1軒目は壽哲廸
2軒目は伜
そして
3軒目が玄孫

「若い頃は国分町（仙台最大の歓楽街）で働いていましたけれど、ビルのなかで上も下も同業者という人間関係がいやで、喧噪から離れた本町で店を始めたんですよ」と言う石山さん。1軒目の「壽哲廸」はアパートの1階を改築した一軒家風の造りで、2軒目の「伜」も大通り沿いのビルの谷間に立つ町家風の木造2階建て。いずれも人に案内してもらわないと素通りしてしまいそうな隠れ家的な立地にもかかわらず、幅広い年代に支持され繁盛している。店舗の設計施工はいずれも宮城県鳴子温泉にある「古遊工房」の遊佐茂樹さんが担当しており、石山さんと遊佐さんは年齢も近く、盟友のような間柄となっている。当然、3軒目も遊佐さんの設計で、となり、今回は古遊工房がすでに保有していた鶴岡の蔵の古材を再生させて「本物の蔵」を建てよう、ということで話は盛りあがった。だが本格的な移築再生の経験のない遊佐さんはそこで慎重になり、以前に倉敷などの古民家再生の見学会に参加した際に知りあい、かねてから交流のあった大角さんを設計者として建主に紹介して、自らは施工に専念したのだという。

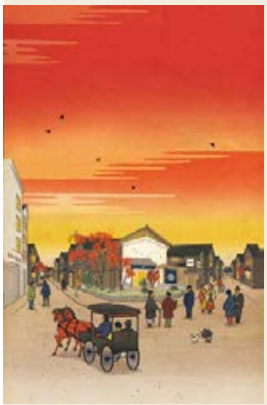
もうひとつの難問は敷地。既存の木造ストックの改築ならいざ知らず、都心で防火法規を満たして木造を新築できる敷地を探すのは至難の業で、1～2年ほど土地探しが続いたのだが、本町商店街の紹介でコインパーキングになっていた土地の20年間の借地権を得ることができた。オーナーは地元の名士で、寂れゆく街に活気が戻るような店を出してくれるのなら、という応援の意味を込めて格安にしてくれたという。

かくして232㎡の敷地に建築面積89㎡、延床面積99㎡。つまり建蔽率27％（最大80％）、容積率はじつに42％（同500％）という、商業地区ではありえないほどぜいたくな木造2階建てが移築再生されることに

明治時代の姿を描いた空想イラスト

春

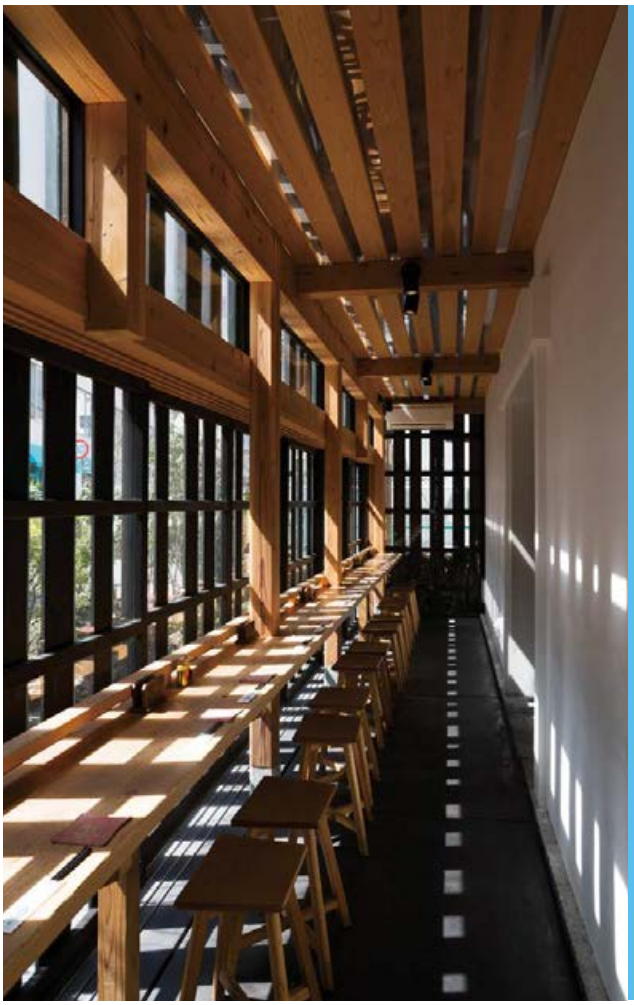
夏



秋

冬

イラスト／庄司嘉宣



Special Feature Hints for Relocating

Case Study 1

「古くて新しい蔵」が
コンセプト。
昔ながらのたたずまいと、
シャープな現代建築が共存している。

写真右ページ／増築された南側のテラス席の外観。夜間はルーバー状の建具から光がもれる。左／テラス席の内部。昼間はルーバーから木洩れ日のような光が室内に入る。

なった。

延床面積がここまで小さくなったのには理由があって、もちろんもともとの蔵の大きさもあるのだが、木造で100㎡を超えるとなると防火法規がたいへん厳しくなることもあり、この面積に収めたのだという。おかげで外構まわりにさまざまな庭木を植える空間的ゆとりができている。

ずっとその場所にあったかのようなストーリー

「遊佐さんのセンスを全面的に信頼していて、その彼が尊敬する建築家だと聞いていましたから、まあ間違いないと信じていましたけれど、模型を見たときは驚きました」と石山さんは言う。大角さんがプレゼンしたのは、「古くて新しい蔵」。開発から取り残された一画のうっそうと茂る木々のなかに、以前から古い蔵が埋もれていて、それをリフォームして店舗としてよみがえらせた、という架空のストーリーを仕立てたのである。店名となった「玄孫」も、建主が玄孫にあたる、つまり建主の「高祖父」の時代から続く蔵を大切によみがえらせた店、というような意味が込められているという。店舗のロゴデザインなどを担当したデザイナーの庄司嘉宣（よしのぶ）さんが、このコンセプトに合わせて明治期と思しき玄孫周辺の様子を、四季折々の風物画として描き下ろしたイラストが店内に飾られていた。なるほど、この蔵にはそんなに長い歴史があったのか、とお客さんに昔の姿を想像させるような、小さな遊び心が効いている。

移築された蔵は桁行方向を半間ほど短くして、総2階だったのを半分吹抜けにしたほかは、ほぼ元通りのプラン。部材はいた

「玄孫」の吹抜け部分に飾られた4枚のイラスト。まるで100年以上前からこの地に立ちつづけてきたかのように、昔の姿が描かれている。

んでいた桁と梁を新調したのと、部分的な交換はあったものの、構造材の9割方はオリジナルのままである。2本の大黒柱は欅の290㎜角の堂々たるもので、ほかの構造材もがっしり太く、60㎜の燃えしろをとっても構造的に耐えうるため、石こうボードなどの耐火被覆をする必要がなく、構造材現しの美しい吹抜け大空間が実現している。これは古民家を再利用することで得られる、たいへん大きなメリットといえよう。

移築後の最大の変更点は、既存の置屋根とは異なる角度の新しい置屋根を架け、その軒先を南側にのばして新たな縁側空間を設けた点だ。東北地方にみられる雁木や雪囲いのモチーフで、内部でも外部でもない「緩衝的な空間」をつくり、通りを眺めながら食事ができるテラス席を用意したのである。この席はなかなか居心地がよく、窓を開け放って植栽越しに通りゆく人を眺めながら一杯傾けるのは至福の時間であった。カップルに人気の席だというのもうなずける。

建築でも料理でもよいものをつくるには時間が必要

デザインのいっさいを建築家にお任せにして、理想どおりになったと喜ぶ石山さんだが、唯一悩まされたのが工期の遅れ。当初は2014年12月に完成するはずが、3カ月遅れて、年を越した真冬に外壁の漆喰塗り工事をすることに。漆喰工事は水分凍結の恐れがあるため冬期は避けるのが一般的で、保温シートを被せての難作業となった。建主としても、かき入れどきの忘年会新年会シーズンを逃したのは経営的にも痛い。

「でも、そもそも店舗をつくるのに半年以上もかけるというのがぜいたくな話なんですよね。棟上げのときには近所のみなさんを呼んで盛大に餅まきをやって、すごく楽しかったですし、毎日現場に通って作業を見ていましたから、職人さんたちが大変な思いをしているのはわかっていました。急がせて中途半端なものにはしてほしくなかったですから、仕方ないですよ」と石山さんは理解を示す。

「飲食店の内装建築って、こう言ってはなんですが、外っツラだけ格好よくして、本気じゃないところがあるんですよ。でもこの蔵は、本物の家をつくっている大工さんがちゃんと建てたものだから、ごまかしがない。うちの店の料理も同じで、下ごしらえから手を抜かずに本物の味を出す。それがお客さんに一番伝わりやすいんですよ」

開店から3年がたつが、新しいのにどこか懐かしい空間が人気となり、夏には屋外にテラス席も出て、すっかり地域のランドマーク的なにぎわいをみせているという。

移築再生を価値づけるストーリー

「東北地方には、今回のように、取りこわされて保存されている蔵や旧家の材木ストックがまだまだたくさんありまして、さらにいうと、取りこわす費用すらなくて空き家で放置されている立派な家もあちらこちらに残っているんですよ」と大角さんは解説する。それらを仲介する業者はいるのだが、名門の旧家などは大きすぎて転用が難しいものもあり、マッチングは容易ではないようである。

そもそも住宅の場合、実家とか親戚の家などといった縁故がない限り、移築して現代的な住宅に転用する需要は少ない。実際、倉敷などでは、不便な場所に立っていても移築せずに同じ場所に改築して住みつづける例が圧倒的に多いという。

「移築してうまくいくのはやはり商業建築でしょうね。太い柱や梁は、誰が見ても値打ちがあるのがわかりますから。でも一方で、その土地とはまったく無関係なものを移して建てるわけですから、脈絡がないといえばまったくないわけで、本当にそれが価値のある行為なのか、新築と何が違うのかと問われれば、返答に悩むところもあります」

長年にわたって多くの古民家再生に携わってきただけあって、大角さんの自問は深い。だからこそ、単に古民家を移築再生すればそれで目的達成、ということではなく、スタッフや建主、お客さん、みんなが共有できる「ストーリー」を仕立てて、古民家の再生によって新たな価値が見出されるように注力しているのであろう。

ちなみに工事単価は厨房設備などを除いて坪65万円。この地域での平均的な木造の工事単価は60万円程度だが、蔵を丁寧に解体して運搬し、鶴岡から熟練の左官職人を呼んで漆喰壁を塗り、1年近くかけて施工されたことを考えれば、関係者の努力もあってかなり安く抑えられている。店の繁盛具合を見てもメリットは明らかである。

「岡山と仙台の往復で、私たちも大変でしたが、この移築再生された蔵の成功事例を見て、旧家の処遇で困っている人たちの助けになればいいなと思います」(大角さん)

移築のプロセス

施工会社が保管していた蔵材を転用

1 山形県鶴岡市にあった漆喰塗りの土蔵。

2 解体した部材を、トラックにのせる。

3 施工会社の古遊工房が、部材を保管。

4 仙台市の都心部にある敷地。

5 蔵材を組み立て、「玄孫」を建設。

写真5点、提供／大角雄三設計室

階段から棟を見上げる。大黒柱、棟、垂木、梁などの構造体は、元の蔵のオリジナル。階段の手すりなどには新材を用いている。

大黒柱などの構造材は太く、表面が燃えても構造的に耐えうるため、耐火被覆がなく、木部が現しになっている。

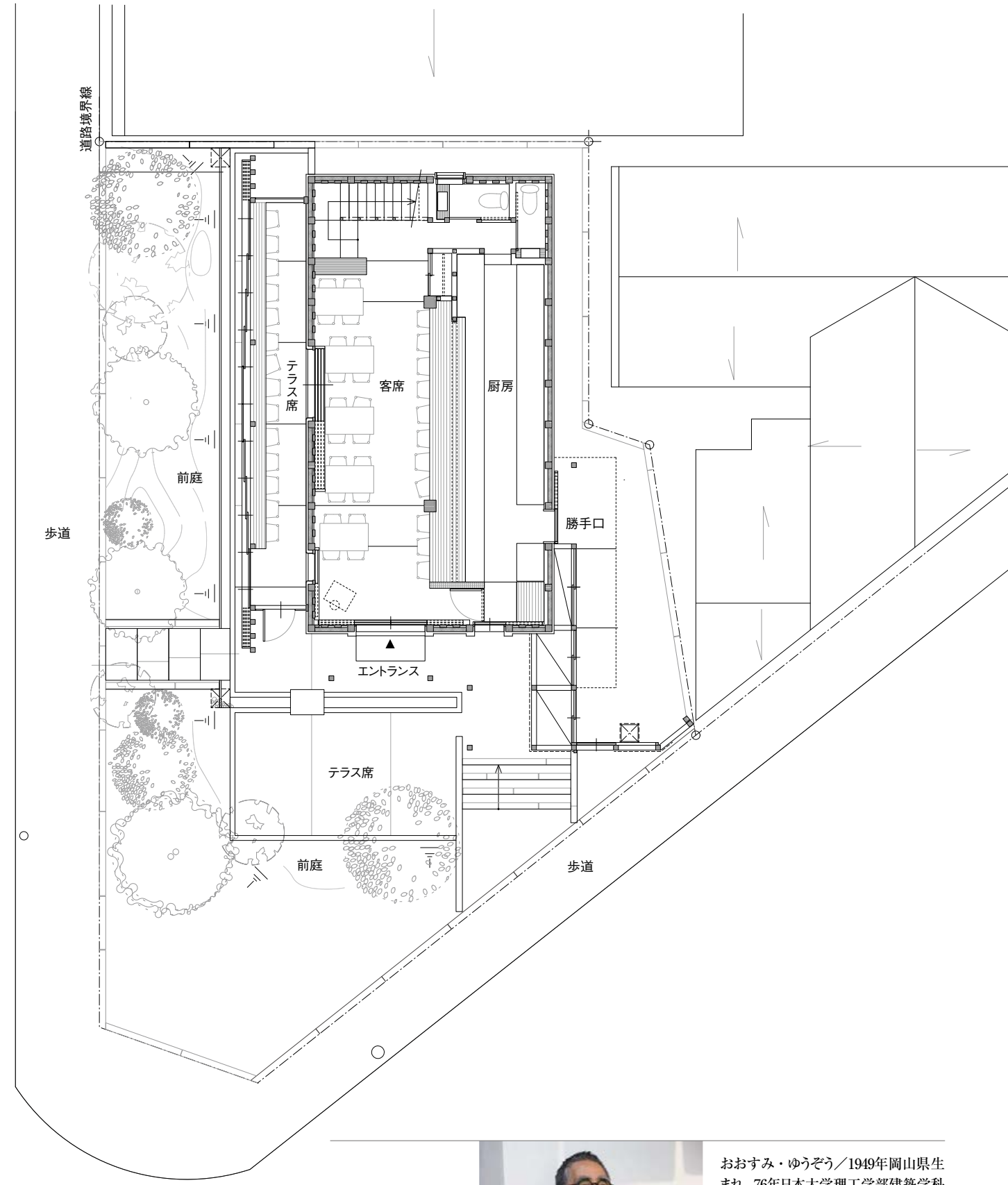
↓1階の客席と厨房。右手にテラス席。左手のカウンターも元の蔵からの転用材。

↓2階の客間と通路。右手の吹抜けによって、1階と2階の空間がひとつにつながっている。

1階平面図

0 1 2m

1/125



大角雄三
Osumi Yuzo

おおすみ・ゆうぞう／1949年岡山県生まれ。76年日本大学理工学部建築学科卒業。87年大角雄三設計室設立、古民家再生工房メンバー。おもな作品=「黒谷の家」(97)、「大山の小屋」(2009)、「東漸寺庫裏」(12)。

仙台駅からほど近い、本町の顔となるような角地に立っている。

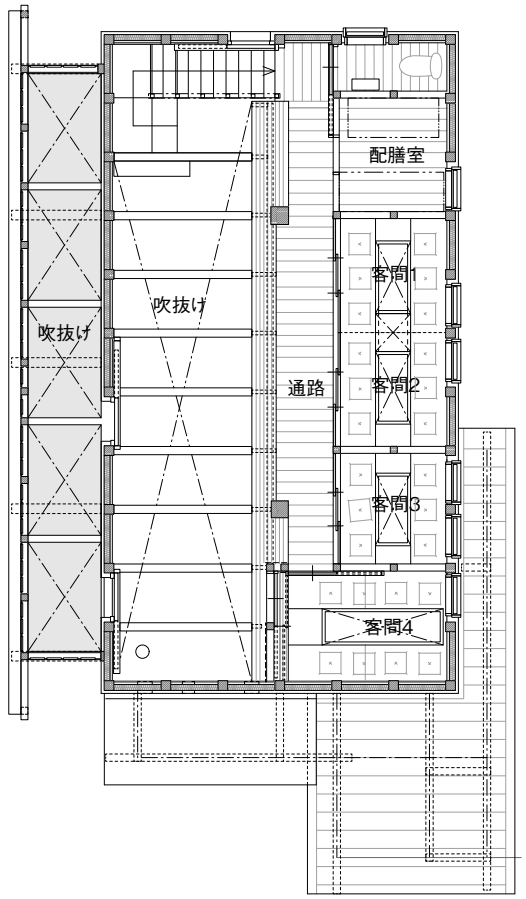
「玄孫」

建築概要	
所在地	宮城県仙台市青葉区本町2-8-1
主要用途	飲食店
設計	大角雄三／大角雄三設計室
構造設計	西建築設計事務所
構造	木造
施工	古遊工房
階数	地上2階
敷地面積	231.68㎡
建築面積	89.20㎡
延床面積	99.52㎡
設計期間	2013年9月～2014年6月
工事期間	2014年7月～2015年3月
おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板竪はぜ葺き、平葺き、日本瓦葺き
壁	漆喰塗り、本焼杉板張り目板押え、杉板目透かし張り、小舞竹張り
開口部	アルミサッシ、木製建具
おもな内部仕上げ	
天井	漆喰塗り、杉板張り、ラワン合板 弁柄塗り、杉木舞目透かし張り
壁	漆喰塗り、杉板張り、ステンレス張り、キッチンパネル貼り
床	墨モルタル金ごて押え、モルタル金ごて押え、堅木板張り、畳敷き

2階平面図

0 1 2m

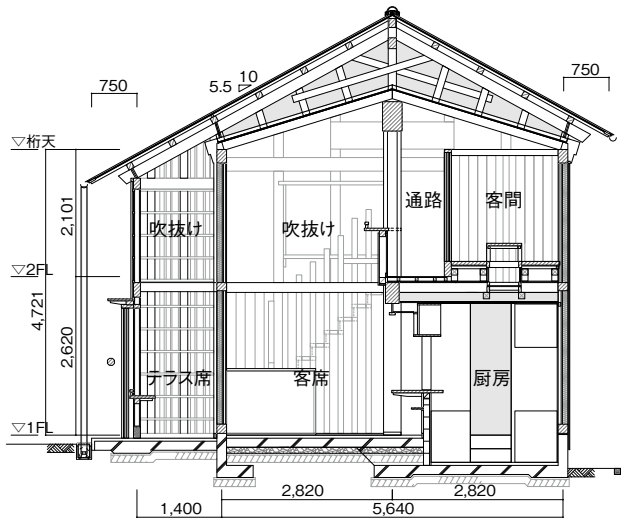
1/125



断面図

0 1 2m

1/125



中庭から左手にゲストルーム棟、正面に食堂棟を見る。もともと中庭にあった2階部分の屋根を、食堂棟の屋根として移設している。

1棟の住宅が分解された。
2階建てを平屋に減築し、一部を中庭化。
そして、瓦屋根をクレーンで移設。
座敷棟、ゲストルーム棟、食堂棟という
3つの建物に生まれ変わった。

取材・文／加藤 純　写真／桑田瑞穂

瓦屋根を、クレーンで移設

作品	高岡のゲストハウス	設計	能作文徳+能作淳平

富山県高岡市の、駅から離れた住宅街。古い家屋と新興住宅が混在するなかに、3棟の小ぶりな平屋建てが瓦屋根を抱いて立っている。モルタルのグレイッシュな壁と、深く濃いグレーの日本瓦が連なる建物群は庭のなかに間隔をおいて点在し、見慣れない風景を生み出している。

これらの建物は、元は2階建てとしてつくられた1棟の住宅を分解、また新築を加えながら再構成してできたもの。道路から奥まった部分に位置する「座敷棟」と、その手前にある「ゲストルーム棟」は、以前はひとつの建物であった。建物の一部を撤去してできたオープンなスペースを介して南側前面道路に沿って立つ「食堂棟」は、基礎と柱梁は新設されている。小屋組と瓦屋根は、以前は住宅の2階部分にあったものが移設されたものである。

最短距離の移築と部分的な移築

築38年がたって老朽化し、修理が必要であった建物の継承と再生にあたり、能作文徳さんと淳平さんの兄弟は「瓦屋根」に注目した。40年近く前は田畑のなかに1軒だけ立っていた住宅は、近年になって周辺の宅地開発が急速に進み、新興住宅に埋もれるような格好に。それでも瓦屋根は、持ち家を建てることの象徴として存続し、街の景観をつくっていたことから、能作兄弟は瓦屋根を残し活用することにしたのである。ふたりは家に架かる屋根を「基本単位」としてとらえ、小屋組の移設、また解体と減築を検討していった。屋根が基本単位であることを象徴するのは、食堂に架けられた寄棟屋根だ。2階部分にあった屋根と小屋組はいったん切り離され、地面に置かれた後、柱梁の構造体の上に架け直された。この移設は、いわば最短距離の移築といえるだろう。建物全体の移設であれば曳家であるが、一部を切り分けることのできる木造の利点をうまく生かした、部分的な移築ともいえる。そして、周辺の田畑のなかで目立っていたであろう寄棟屋根は、移設によって近隣の新たな顔となっている。

元の建物は、じつは、設計した能作兄弟が、子どもの頃に、祖父母と両親とで暮らした家だ。能作兄弟が小学生のときに両親とともに街なかに引っ越した後、建主の祖父は他界。一人暮らしで身体の不安が徐々に増す祖母の様子を、家族で見守りたいと始まったプロジェクトである。新築か改修かという選択肢から、瓦やみごとな木彫りの欄間、雪見障子などを残すことを考え、また祖母が住みながら、工事することを優先させ、パーツだけではなく建物自体を根拠にして活用するリノベーションに至った。

祖母が暮らす座敷棟。
帰省した家族や客が泊まるゲストルーム棟。
さまざまな人が集う食堂棟。

中庭。2階建ての部分があったところ。左手に座敷棟、正面にゲストルーム棟、右手に食堂棟。

座敷棟は、続き間に浴室・洗面・トイレ・キッチンの水まわりを増築したもので、祖母が暮らす家に。ゲストルームは、仕事やプライベートで帰省する文徳さんと淳平さん、またお客さんが泊まる場所に。食堂は、おもに能作さんの母親が主宰するチーズ教室やワークショップ、パーティなどで人が集える場所に。既存木造家屋は減築、解体、移設によって、家族がこれから必要とするニーズに見合う集合体となった。

過去と未来をつなぐ3つの建物

座敷棟では、元の和室の続き間を残し、畳が張り替えられた。天井ははがして既存の小屋組を現し、座敷に残されていた欄間や襖、雪見障子がリユースされている。外壁にはセルロースファイバーを充填し、シングルガラスのアルミサッシ窓はペアガラスのアルミサッシ窓に取り替えられた。庭に面した廊下は、庭の小石を混ぜてかき落とし仕上げとした土間に。ここでは雪が積もり湿度の高い冬でも洗濯物を干すことができ、植物を育てることができる。水まわり空間は、北側の端に既存の建物と切妻屋根をのばすように増設。仕上げは明るさと清掃性を求めて白を基調とした素材が選択されているが、梁の架け方や間隔は既存家屋のものが踏襲された。文徳さんは「既存

部分との距離感を意識しながら、つけたす部分を昔のものに擦りあわせた」と表現する。水まわりでは客と祖母の使い分けができるよう、土間と奥とで回遊する動線を確保している。

ゲストルームは、元は寝室だった部屋が減築によって離れのようになった棟だ。内部の壁は庭の土を混ぜた荒壁で、左官職人の手によるもの。ふたりは「納屋や牛小屋のような雰囲気を求めた」と言う。窓は、座敷棟と庭に向いた面ではアルミサッシ窓に、中庭に向いた面では木製の引き戸に。この戸にはガラスが入っておらず、茶室のにじり口のような設えとなっている。

食堂棟では、既存の寄棟屋根の大きさに合わせて全体の大きさが決められた。前面道路側と中庭に面して設けられた、大開口部が特徴だ。どちらにも木製の引き戸が入り、道路側には開口に沿って長大なキッチンのカウンターが造作工事でつくられた。なお、このカウンターには、座敷棟の浴槽と同じくテラゾー仕上げが施されている。

「少し前の家づくりで普通に見られていた素材を、積極的に検討しました。改修では当初のものを残すか、便利な既製品とするかという二択ではなく、消えつつある技術をみんなで学びながらつくることができないかと考えたのです」と語る淳平さん。ふたりの感覚は、新旧の対比をことさら強調せず、過去と未来を建物のつくり方や材料でつなげていく方向で、共通している。

クレーンで吊り上げられた屋根

そして新旧をつなげる感覚は、移設した寄棟屋根に突出して表れている。文徳さんと淳平さんは屋根をどのように残すか、工務店に相談しながら濃密に検討していった。小屋組を解体し、再度組み直して瓦をのせる方法は、高いレベルの技術が要求されるうえ、日数がかかるぶん金額も要する。一方で工務店からは、小屋組ごとクレーンで吊って移動する方法が挙がってきた。今回は寄棟形式で、四周の桁が火打梁によって安定した構造であり、小屋組だけを吊っても変形や崩壊が生じないという見込みであった。ふたりは小屋組と屋根を庭の空きスペースに仮置きして保管できることを確認し、工事を段階的に計画した。

小屋組は、棟と桁の6点にワイヤーを留め、接合した柱頭部分を切断。クレーンで吊り上げて地面に置いた。寄棟屋根を地面に置いた状態で、いたんだ瓦の葺き替えや、下地の野地板や垂木の補修を足場なしで進めることができた。なお、瓦をはずして確認したところ半分ほどはいたみが進み再利用できず、新たに新潟の瓦製作工場に依頼

Special Feature Hints for Relocating

Case Study 2

移築のプロセス

屋根だけをクレーンで移設する

1 2階建て部分の屋根の棟と桁にワイヤーを留める。

2 クレーンで、小屋組全体をそのまま持ち上げる。

3 敷地内の空き地まで、小屋組を移動。

4 小屋組を地面に置いて、保管する。

5 食堂棟の桁から下の軀体が完成。

6 食堂棟の軀体の上に、保管していた小屋組をのせる。

写真6点、撮影／鈴木淳平

ゲストルーム棟の内観。既存の軀体を用いながら、内外装を改修している。入口は、茶室のにじり口のようなデザイン。

長い時間のスパンのなかで
設計すれば、
新築も移築もリノベーションも、
1本線でつながっていく。

座敷棟の内観。天井をはがしているが、欄間、障子、襖など、ほぼオリジナルのまま。

Special Feature Hints for Relocating

Case Study

2

し、色を既存の瓦に合わせて焼き直したという。また野地板には構造用合板を2枚重ねて張りあわせることで、十分な水平剛性を確保。減築で離れのゲストルーム棟ができ、食堂棟の基礎と柱梁の建て方が終わった後に、小屋組を再びクレーンで吊り上げて食堂棟の上にのせ、緊結した。小屋組の移動はそれぞれ15分ほどの短い時間であったというが、屋根が凧のようにダイナミックに動く様子は彼らのホームページ上の動画で確認でき、興奮を誘うものである。

表面だけではなく古い木造建築のDNAを継ぐ

普段は別々の事務所で活動するふたりは、このプロジェクトで意見を合わせながら検討するだけでずいぶんと時間がかかったという。しかし、リノベーションをするうえでの新たなベクトルを共有することができたようだ。淳平さんは「これまではリノベーションといっても、新築をよしとする主義が残っていたと思います。ここでは新築も既存の建物と連続している、別の可能性をみることができました。ある程度の時間のスパンのなかで設計し、1本の線でつながっているようにしたい」と語る。文徳さんも「今できることを時間の流れに結びつけながら考えたい」とするが、「新築では、断熱などの性能や構造を意識的に考えられることがメリット。それぞれの特徴を考えながらこれからも設計したい」と語る。形だけ、表面だけの新旧の対比や混在ではなく、この事例のように骨組みや形式、素材や工法といった木造のDNAを受け継ぐかたちで古い建物が移築されるなら、未来へ継承されるリノベーションの姿も、さらに発展していくにちがいない。

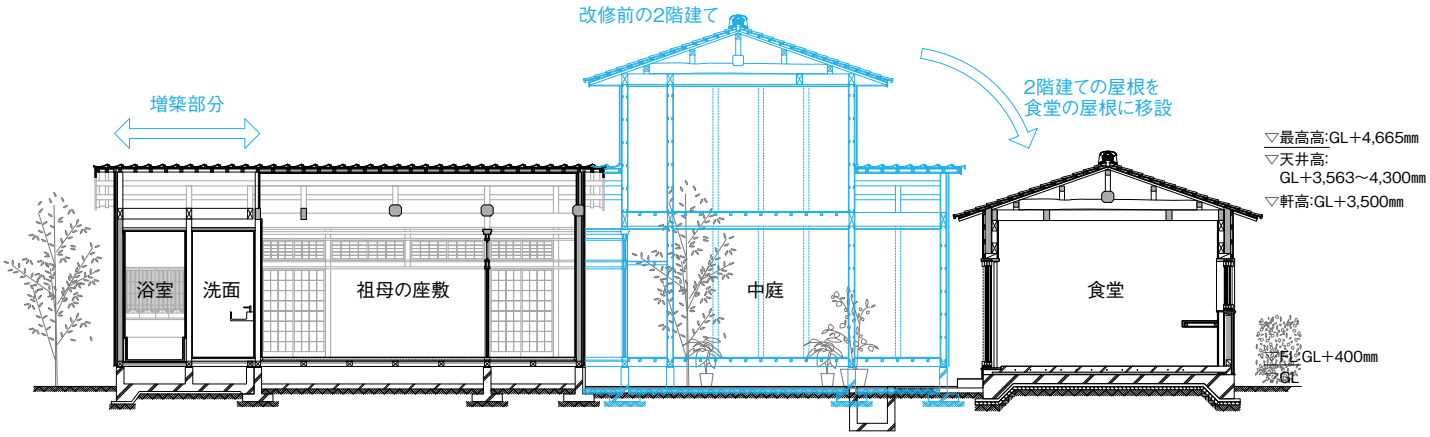
↓食堂棟の内観。新築の白い壁面の上に、既存の小屋組がのっている。典型的な京呂組。

↑食堂棟の外観。外壁はモルタルの下地のままだが、将来、黒漆喰塗りを施す予定。

断面図

0 1 2m

1/150

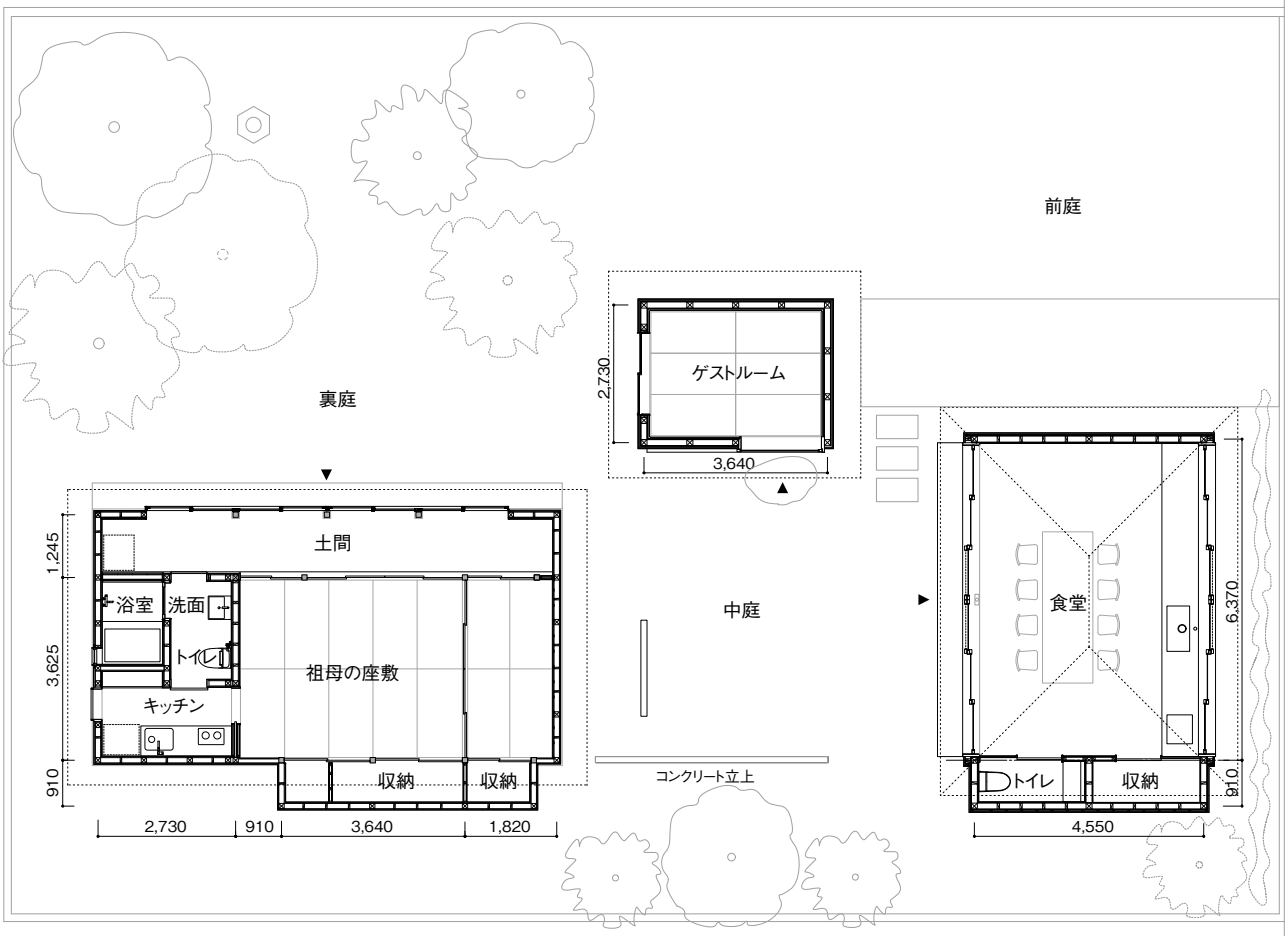


平面図

0 1 2m

1/150

N



敷地は、高岡市の住宅地にある。

「高岡のゲストハウス」

建築概要	
所在地	富山県高岡市
主要用途	住宅、ゲストハウス
家族構成	1人（能作文徳、能作淳平の祖母）
設計	能作文徳+能作淳平
構造設計	坂田涼太郎構造設計事務所
構造	木造
施工	モノ・スペース・デザイン
	（第1期、第2期）
	オーデック（第3期）
階数	地上1階
敷地面積	462.68㎡
建築面積	90.03㎡
延床面積	90.03㎡
設計期間	2010年4月～2016年10月
工事期間	2014年9月～2015年8月（第1期）
	2015年10月～11月（第2期）
	2015年12月～2016年9月（第3期）
おもな外部仕上げ	
屋根	瓦（既存）
外壁	下地モルタル金ごて押え
	t=20㎜（黒漆喰塗り予定）
開口部	木製建具、アルミサッシ
おもな内部仕上げ	
食堂	
床	シンダーコンクリート t=70㎜
	一部に既存赤御影石埋込み
壁	珪藻土塗り t=2㎜
天井	既存小屋組現し、
	ラワン合板 t=12㎜
ゲストルーム	
床	畳 t=60㎜
壁	土壁（荒壁） t=25㎜
天井	既存小屋組現し、
	ラワン合板 t=12㎜
祖母の座敷	
床	畳 t=60㎜
壁	珪藻土塗り t=2㎜
天井	既存小屋組現し、
	ラワン合板 t=12㎜

写真左

能作文徳

Nosaku Fuminori

のうさく・ふみのり／1982年富山県生まれ。2005年東京工業大学工学部建築学科卒業。07年同大学大学院建築学専攻修士課程修了。10年能作文徳建築設計事務所設立。12年同大学大学院建築学専攻博士課程修了後、同大学大学院建築学系助教を経て、18年東京電機大学未来科学部建築学科准教授。おもな作品=「ホールのある住宅」（10）、「Steel House」（12）。

写真右

能作淳平

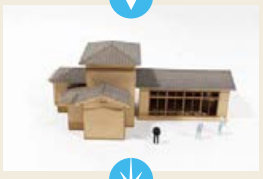
Nosaku Junpei

のうさく・じゅんぺい／1983年富山県生まれ。2006年武蔵工業大学（現・東京都市大学）工学部建築学科卒業。06～10年長谷川豪建築設計事務所。10年ノウサクジュンペイアーキテクツ設立。おもな作品=「新宿の小さな家」（11）、「ハウス・イン・ニュータウン」（14）、「あきるのシルバーハウス」（15）。

工事全体のプロセス

改修前の状態。

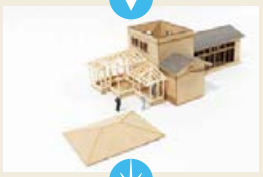
座敷棟に水まわりを増築。



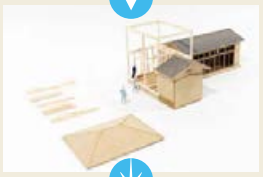
祖母が暮らす座敷棟の完成。

第1期工事

2階建て部分の屋根をクレーンで移動。

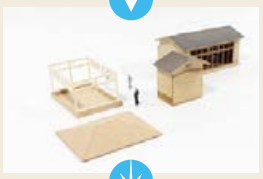


玄関などを減築。

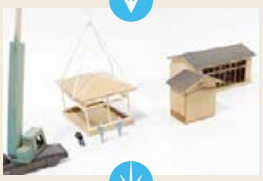


2階建て部分を減築。

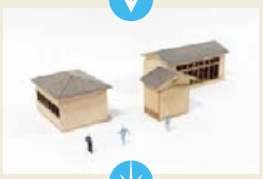
第2期工事



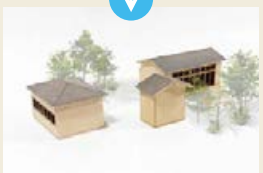
食堂棟を新築。



新築した食堂棟に、既存の屋根をのせる。



食堂棟、ゲストルーム棟、座敷棟の完成。



庭を整備。

第3期工事

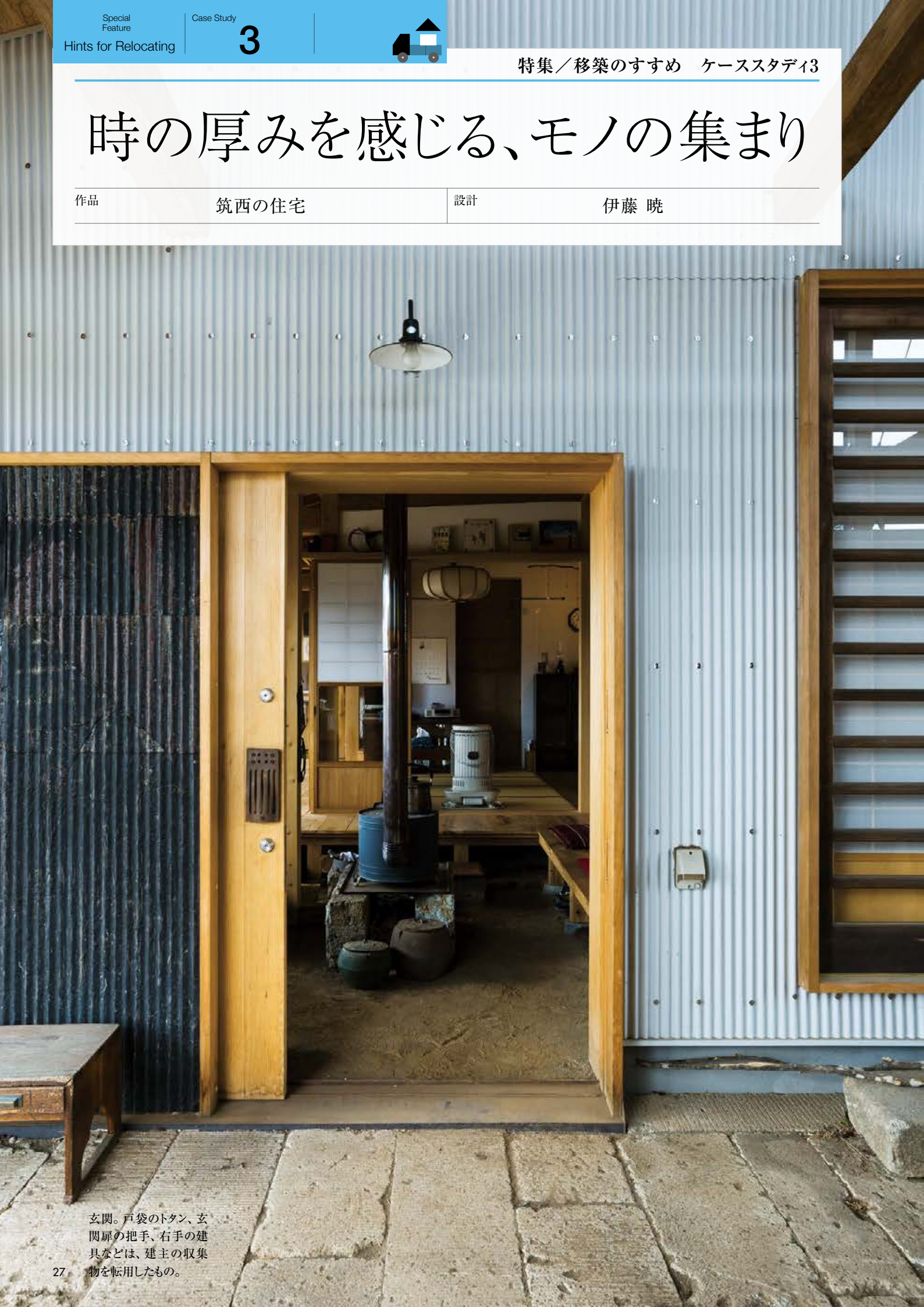
外土間の吹抜け。和小屋など、建主の生家にあった蔵の一部を移築し、転用している。柱は新材。

生家の敷地内にあった古い蔵を解体し、
新しい材料と組み合わせて再構築した住宅。
蔵の建設年代は不明で、傑出した価値があるわけではないが、
時間が堆積した記憶の厚みが、
唯一無二の家族の器を生み出している。

取材・文／伊藤公文　写真／傍島利浩

時の厚みを感じる、モノの集まり

作品	筑西の住宅	設計	伊藤 暁



玄関。戸袋のトタン、玄関扉の把手、右手の建具などは、建主の収集物を転用したもの。

「雑」という字にポジティブな意味が与えられることは少ない。

雑然、雑念、雑魚、雑音、雑種、雑巾……。そこでの「雑」は、まとまりがない、つまらない、くだらない、ささいである、価値が低いなど、疑いもなくネガティブな意味でしかない。

では、雑踏、雑貨、雑煮の「雑」はどうかといえば、ポジティブに解釈することも可能であろう。多様なものが、単一の価値観によって排除されることなく、同じ場所に寄せ集まる。その錯雑が包容を、その猥雑が活気を、その複雑が別次元の価値を生み出していく。そのように考えれば、「雑」は必ずしもネガティブではない。

かつて筆者は、名古屋郊外の雑木林のなかに埋め込まれるように建てられた福祉施設を評するにあたってこのように書いたが(*)、冷気残る3月初旬に「筑西の住宅」を訪れた際も、家の内外にポジティブな「雑」の力が満ち満ちているのを感じた。

蔵の部材の再利用が与条件だった

建主の間々田(ままだ)さんは、大学の建築学科を卒業し、会社勤めを経て生家に戻り、曽祖父が創業した鉄を扱う問屋を4代目として継いだ。生家近くに夫婦と長男、3人家族のための自宅を新築するにあたり、大学の後輩の建築家・伊藤暁さんに設計を依頼したが、前提として生家の敷地内の蔵を解体し、その部材をできるだけ再利用することを条件とした。それ以外にも、収集、貯蔵していたさまざまなものや家具のなかから選択して再利用、再配置することを望んだ。それはたとえば祖父の時代までに扱っていた鉄製品であり、寺の客殿の建具であり、蔵にしまわれていた長持であり、夫人の実家にあった型板ガラスなどである。伊藤さんが採寸し、画像に納めた点数は100を上まわったという。

この地に生まれ育ち、事業を継承した建主にとって、自らの住まいを、過去との関係性を断絶してしまわず、過去から現在へ、さらに未来へと進む流れのなかに位置付けたいという想いを強くもったのは自然なことだ。もしその想いが古いものへのかたくなな愛着だったり、茫洋としたノスタルジックな気分から発したものだったら、おそらく設計者が介在する余地はなかっただろう。しかし建主は、今の時代に毎日を快適に暮らしていくための拠点としての住まいを望んでいたし、それに応ずる設計者の視線も過去を振り返るのではなく、過去を基点にしつつあくまで前に向かおうとするものだった。こうした共通の志向が両者にあったからこそ、ツー・バイ・フォーのプレハブ住宅に比しておそらくは3割増し程度の費用がかかることを引き受けながら、また時間と手間をたっぷりかけながら、幸せな協働がなしえたにちがいない。

そこかしこに鉄の素材がある

一面の畑地。筑波山の双峰が南東方向、近くに望める。屋敷林に囲われた農家、高くそびえるケヤキの木立、小さな社が点在する一方、プレハブ住宅が並び立ち、小規模な太陽光発電パネルがそこここに設置されている。新旧が混在するとりとめのない風景。そのなかに「筑西の住宅」は違和感なく、溶け込んでいる。

南、西、北の3方向からの外観は格別に突出したところがなく、注意しても見過ごしてしまいそうだ。それが一転、道に沿う東側にまわると、ファサード一面、巨大な11枚の鉄板が待ち構えていて、その重量感と質感に圧倒される。これは道路側からの視線をさえぎるための水平ルーバーで、上方ほど取り付け角度がゆるくなっている。

それにしてもほかの要素とのスケール感の格差は歴然としていて、笑えるほどに豪快だ。設計者のこの提案に建主夫人は首をかしげたが、鉄を商う建主はこれしかないと即座に賛意を表し、ためらわず自作に踏みきったという。そういえば、郵便受けの付いた門柱、カウンターの支持台、吹抜けまわりの手すり、入口扉の把手など、そこかしこに建主自作、あるいは持ち込みの鉄の部材がある。きわめつけは蔵の外壁に使われていた乱張りでコールタール塗りされていたトタン板を利用した玄関戸袋で、ハイセンスな抽象絵画の趣がある。このほか、外壁のガルバリウム鋼板、現しの丸鋼ブレース、鉄板の薪ストーブなどを含め、鉄という素材が家の中に静かに通奏低音を鳴り響かせている。

新旧が混ざる融通無碍

元の蔵の建設年代は不明だが、半分が和小屋、半分が登り梁であることから、年代も用途も定かでないふたつの建物を合体したものであることはまちがいない。おそらく、ふたつの建物から使えそうな部材を選択し、寄せ集め、勾配を揃え、再構築したのだろう。

小屋組は解体後、いったん仮組して微調整し、そのまま使用している。和小屋と登り梁の異種合体のさまはちぐはぐ、珍妙ともいえるが、不思議と違和感はない。由緒は知れぬが古色を帯びた部材が、新たな居場所を得て泰然としているからだろう。

*「愛知たいようの杜」(設計:中村勉)についての評論(『AXIS』109号)。

南側外観。鉄に覆われた東面とは異なり、広い庭と向きあった開放的な造りになっている。

まったく表情の異なる東と南のファサード。部材も新旧、素材も鉄や木とさまざまだが、ポジティブな「雑」の力が満ちている。

東側外観。正面のルーバーは、鉄の問屋を営む建主による自作。鉄板の表情は、古い木材ともなじんでいる。

一方、柱はといえば、元の蔵は大谷石を3段に積んだ土台の上に柱を立て、2階の天井は低くて屋根裏のような空間だったので、階高を高くして居住性を確保するために、3×7間の平面、本数、位置は元の状態を踏襲しつつ、すべての柱を新しい材に置き換えている。これらの点からすると「筑西の住宅」は移築というよりは材の転用の範疇に含んだほうがよいのだろう。

それにしても、なんという自由自在、融通無碍。木材だからこその冗長性の賜物だ。このような、部位に応じて新旧の部材を適材適所に用いる方法はこれからも広がっていくのでは、という問いに、設計者の伊藤さんは顔を曇らせた。今回のケースは70歳を超える棟梁が40代の弟子ひとりを連れ、久しぶりで腕が振るえると勇んで取り組んだ稀な成果であって、そうした能力と意欲をもった大工は全国どこでも消滅の危機にあって久しく、今後の展望は明るくないという。

「雑」の集合のポジティブな力

室内では何よりも内土間の存在が際立っている。薪ストーブが真ん中に置かれたこの空間は、軒庇下の外部空間と古材の雪見障子で囲われた奥の内部空間（冬の居間）との緩衝を形成して居住性を高めるとともに（冷房はなく暖房は薪ストーブと石油ストーブの2台のみ！）、蔵の床材を転用した縁側状の板張りは集い、接客、農作業時の休憩など、多様な使われ方がなされる場所として、正しくこの家の核となっている。

ゆっくりとあたりを見渡せば、あらゆるモノのあいだに確たる秩序もなければ、画然とした境もない。古材かと思えば新しく、その逆もある。板の間と畳が不思議な同居を示しているかと思えば、巨大な鉄板と繊細な簾が隣接している。古色あふれる階段とアルミサッシが向きあい、ミニマルなLEDダウンライトと和風の様式的な吊り照明が並び、ステンレスの薄いカウンタートップと切り倒されたケヤキの極厚のカウンターが近接している。鬼瓦、蹄鉄、火消壺などおびただしい古いモノとカヤック、ウクレレ、プラスチック玩具、マンガ、小説、地球暦などの無数の新しいモノが混在し、並置されている。

それらを個別にみると、前述の小屋組を含め、傑出した価値はどこにも見出せない。いわば平凡な「雑」の集合に見える。けれどもそれらのすべてに家族の成員が関係する時間が堆積し、記憶の厚みがまとわりついていることを理解すると、「雑」の集合のポジティブな力はたちまち露わになり、そこでしかありえない強い固有性とどれひとつ欠かせない希少性を帯び、家中に確かな、喜びにあふれた鼓動が生まれているのを実感する。

「筑西の住宅」の意義はそこにあり、肩ひじ張らずに生活を楽しみつくそうとする建主一家と、徳島の山間部での木造改修（「えんがわオフィス」など）の経験を生かして難題に正面から向きあった建築家による、すぐれて稀有な協働の挑戦の証といえる。

移築のプロセス

古材の転用も新材の使用も臨機応変

1 近隣の生家に立っていた古い蔵。建設年代は不明。

2 蔵を解体し、いったん軸部を倉庫内に移築。

3 一部の部材を、新材とともに組み上げていく。

4 小屋組は、元の部材をほぼ転用している。

写真4点、提供／伊藤暁建築設計事務所

内土間から、1階全体を見渡す。夏の居間、冬の居間と、入れ子状に部屋が配置されている。

↓内土間が居間を囲み、室内に縁側がある。左手の雪見障子も、建主の生家にあったもの。寸法を測って、それをもとに設計した。

古材と新材を
組み合わせた構造体のなかで、薪ストーブ、
雪見障子、CD、パソコン……、
新旧のものが混ざりながらも、なじんでいる。

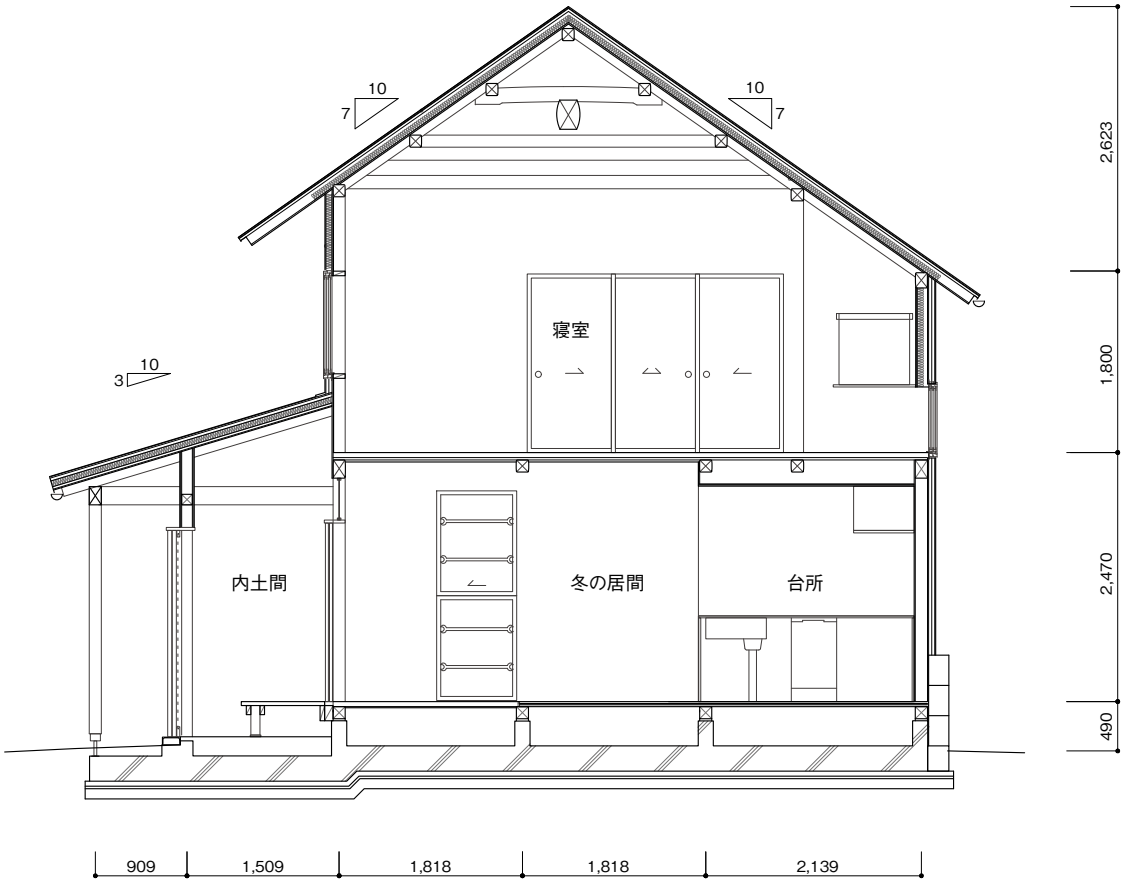
↓2階。書斎から寝室を見る。書斎の床はルーバーになっていて、光や風が抜ける。階段の手すりは、建主の自作による鉄製品。

断面図

0　0.5　1m

1/75

寝室上部の小屋組。書斎部分が和小屋なのに対して、この部分は登り梁による構造。同じ蔵から転用した小屋組だが、場所によって構造が異なる。



南東側から見た外観。

「筑西の住宅」

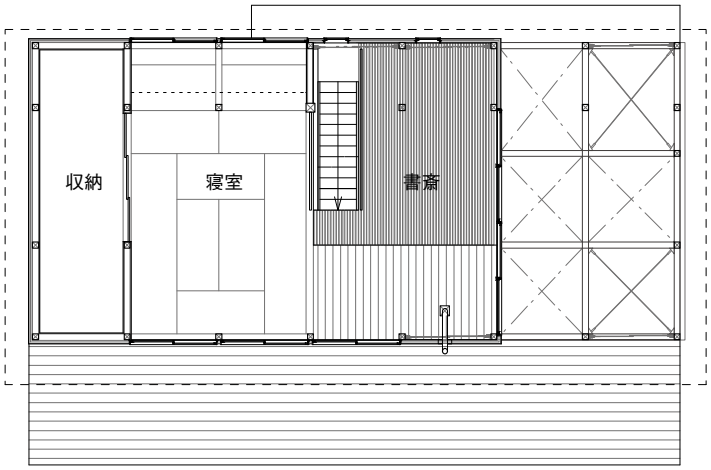
建築概要	
所在地	茨城県筑西市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	伊藤暁／伊藤暁建築設計事務所
構造設計	山田憲明構造設計事務所
構造	木造
施工	田中工務店
階数	地上2階
敷地面積	733.54㎡
建築面積	104.26㎡
延床面積	129.03㎡
設計期間	2015年2月〜2016年2月
工事期間	2016年3月〜10月
おもな外部仕上げ	
屋根	アスファルトシングル葺き(母屋)、ガルバリウム鋼板横葺き(下屋)
外壁	ガルバリウム鋼板小波板
開口部	アルミサッシ
外土間	大谷石敷き
おもな内部仕上げ	
内土間	
床	三和土
壁	ラワン合板
天井	既存の蔵の床材
夏の居間	
床	畳
壁	ラワン合板 障子紙貼り
天井	ヒノキルーバー
冬の居間	
床	畳
壁	ラワン合板 障子紙貼り
天井	既存の蔵の床材
書斎	
床	ヒノキルーバー
壁	ラワン合板 障子紙貼り
天井	構造用合板現し

平面図

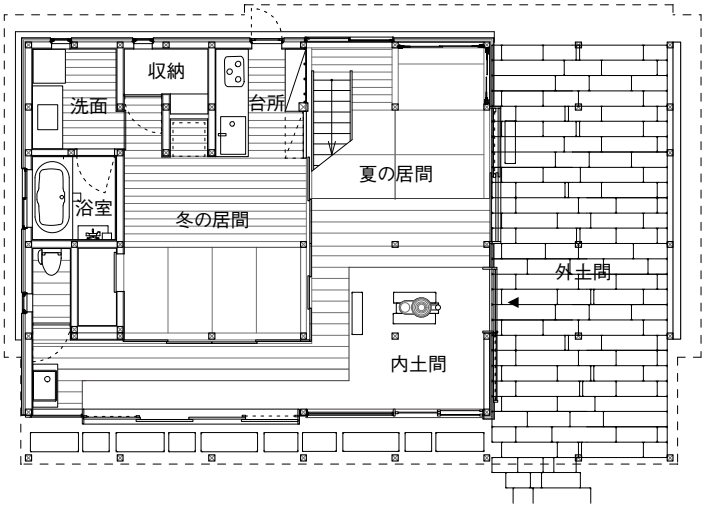
0 1 2m

1/150

N



2F



1F

Ito Satoru

伊藤 暁

いとう・さとる／1976年東京都生まれ。2000年横浜国立大学工学部建設学科卒業。02年同大学大学院修士課程修了。02〜06年aat+ヨコミゾマコト建築設計事務所。07年伊藤暁建築設計事務所設立。10年BUS参加。17年東洋大学准教授。おもな作品=「半丈の書架」(13)、「えんがわオフィス」(13、須磨一清+坂東幸輔と共同設計)、「武蔵境の住宅」(16)。

区画整理事業によって、
前面道路が拡幅して土地が狭くなったが、
曳家によって、既存の建物を残した。
さらに移築した古い呉服屋や
新築の母屋を組み合わせ、敷地内の建物を再編集。

取材・文／大井隆弘　写真／川辺明伸

移築、曳家、新築の組み合わせ

作品	石神の家	設計	増田啓介+増田良子

3棟の建物が庭を囲んでいる。新築された母屋、同じ敷地内で曳家された座敷、別の敷地から移築してきた酒屋（元呉服屋）。

今からおよそ100年前。遺伝学の開祖、ウィリアム・ベイトソン（1861〜1926）が、ある発見をした。それは、生物の身体が分枝する際に遺伝情報を失うと、以降はシンメトリーに展開するというルールである。たとえば、触角のつけ根で情報が失われてしまった場合、触角が2本シンメトリーに出現し、真ん中と合わせて合計3本になる。

これを逆から考えると、シンメトリーとは、何か情報を失ったときに現れやすい現象なのかもしれない。もちろんベイトソンはそんなことは言っていないのだが、ここで紹介する「石神の家」の設計者、増田啓介さんと良子さんの話を聞くと、そんな考えもあながち間違ってはいないように思えた。

パズルのように敷地を再編

埼玉県川口市石神。このエリアは、1994年から土地区画整理事業が進められ、現在半分ほどの工事が完了している。「石神の家」がある敷地は、裏通りはすでに工事ずみだが、表通りの拡幅工事は未完成で、多くの建物の後退が待たれている。ここでは、創業200年になる酒屋の店舗と母屋、そして座敷の後退がせまられていた。

そこで、増田さんがまず手をつけたのは裏通り側の畑。家族の住まいを移すために母屋が新築された。引っ越しがすんだところで、次は表通り側の座敷を敷地なかほどへ曳家。続けて店舗と母屋を解体し、3キロほど離れた場所から築100年近い呉服屋の店舗と洋間を移築した。この座敷と店舗はつなぎあわせて1棟としているので申請上は2棟の新築だが、都市スケールで建物を移動させるなど、上空からパズルをしているようなダイナミックさを感じる。

配置図

酒屋は移築 座敷は曳家

座敷の曳家は、建主からの希望だった。当初は店舗の一部も移築できるか検討したのだが、鉄骨造に木造をのせた2階建てのうち、鉄骨部分が現行法の構造強度を満たしておらず、その脇に立つ座敷だけを移動することにした。

呉服屋のほうは、建主も増田さんもまったく知らなかった人。ソーシャルメディアにあがった建物解体と部材譲渡の告知を、友人が知らせてくれたそうだ。「石神の家」の建主は、大量の書籍をはじめさまざまなコレクションを持っているので、コレクター魂に火がついたのかもしれない。ぜひ見に行こうと盛りあがり、呉服屋の店舗と洋間の移築が決まった。

啓介さん曰く、曳家に比べて、移築は成功する可能性が低いらしい。希望者こそ多いが、双方の工事日程が合わなければ、部材の保管場所が必要になるからだ。ここでは幸い近所の空き地を借りることができたので、座敷の曳家と店舗の解体を待つことができた。増田さんは、これまで曳家や移築の経験がなかったので、再利用のための手ばらしができる大工も、同じ友人に手配してもらった。

母屋だけは新築

移築が初めてとなると、設計者本来の意図や性格は、まず新築の母屋のほうから読

酒屋 → **移築**

新しい酒屋は、
解体予定だった近隣の呉服屋を
移築して再利用した。

移築のプロセス

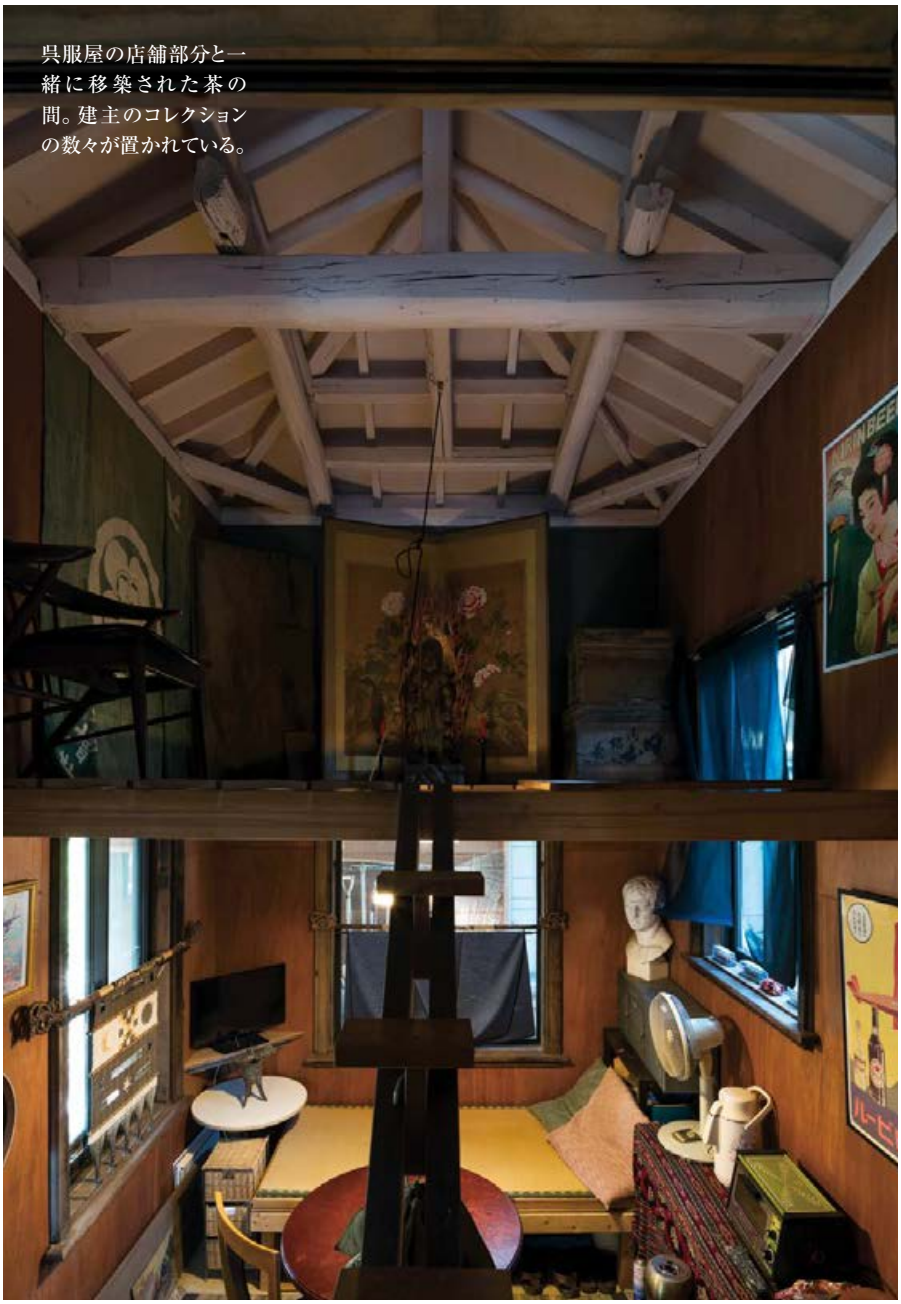
呉服屋が酒屋に生まれ変わった

1 3kmほど離れた敷地に立っていた呉服屋。

2 解体して、店舗部分の部材をトラックで運ぶ。

3 酒屋として、再び組み立てる。

写真3点、提供／増田アトリエ



呉服屋の店舗部分と一緒に移築された茶の間。建主のコレクションの数々が置かれている。

模型や暖簾などの
コレクションを持つ建主。建築も、
そのコレクションの一部のように、
移築して収集した。

↓酒屋の店舗内部。売り物の酒が置かれている棚は、呉服屋の格天井を再利用したもの。

↓酒屋2階の予備室。移築してきた小屋組の現し。軀体は、ほぼオリジナルのまま。

みとるのがよさそうだ。母屋は、1階にリビングとダイニングがあり、2階に4つの個室をほぼシンメトリーに配置している。最も気になる点は、さまざまに角度がふられた1階外壁と土間の形状であろう。この角度のとり方に、増田さんの意図が隠されているのではないか。

その理由を聞くと、「私たちは、設計や施工の過程が見えることを大切にしています。階段の位置は、2階の間取りを整理した結果、土間の位置に下りてきました。そのため、階段に合わせて土間を屈折させています。もちろん、直線になるよう整理することはできます。しかし、整理しすぎると、設計の過程も消えてしまいます」と良子さんは言う。

啓介さんも続けて、「たとえば、人の顔がよい例です。シンメトリーに見えて、実際は右だけ二重だったり、左だけえくぼができたりします。これが、人の表情をより豊かにしている。建築も同じで、シンメトリーのようなシンプルな構成をとりつつも、異なる環境や状況に対応しながら、その都度変化させる。そうすると、時間の重なりが感じられる、より豊かな空間が表れると考えています」。なるほど。シンプルな構成をベースにすることで、設計や施工の過程がより見えやすくなる。新築した母屋から増田さんの設計理念が感じられた。では、移築した店舗や洋間、曳家した座敷には、その理念がどのように表れているのか。

移築と曳家が多様な痕跡を生む

呉服屋の店舗・洋間は、新しく酒屋の店舗と茶の間に変わった。また、商品のストックをする外物置が必要だったので、庭へのアプローチを残しつつ、片流れの屋根を追加している。移築はまず、不要な部分を解体し、瓦をはずして軸組を丁寧に解いていった。土壁や屋根下地は原型をとどめなかったので、軸組を中心に瓦や木部造作の一部を再利用している。軸組は、100年ぶりに荷重が解放され、各部で大きな反りやねじれが出たが、保管中に継手仕口の調整をして、再びうまく組み上がった。もちろん、いたんだり、強度が不足する部分は、新しい木材を追加している。黒色に塗装してあるため目立たないが、補強金物も多く使用した。屋根には、新たに断熱と通気層を設けたので、けらばの瓦と破風のあいだに新しい層ができた。

木部造作の一部というのは、たとえば、外倉庫の表通り側の壁面である。店舗の2階にあった雨戸は下部のパネルに、天井の猿頬の竿縁は上部の横格子として再利用している。あるいは、移築後の店舗の壁2面を占める商品棚は、もともと洋間にあった格天井で、店舗にあった上がり框を土台にして、ふたつに切って設置した。日本酒や焼酎の瓶が、格天井のマス目にぴったり納まっている。

一方の座敷は、基礎工事の後、表通り側から90度回転して着地させた。曳家のために、一時的に土台下に鉄骨を挿入したので、新しい基礎もそのフレームを避けるように欠込みをつくっている。この欠込みが曳家の痕跡になる。土壁がそのまま残せることや、構造補強を押入れなどの目立たない部分で行っていることは、移築と違う点だろう。

ただ縁側部分は大きく変わっていて、縁板を少し残して後は土間にした。床の間の裏には書庫を増築し、土間と連続させている。土間の前には、昔の母屋の玄関庇を転用してつけ、そこから広がる庭には、曳家した際に使用した枕木、基礎工事で出土した旧道の縁石などを再利用している。

新築と移築をつなぐアドリブ操作

このように、構造や現代の暮らしに合わせて、軸部や屋根が組み上げられる一方で、「これは、昔あそこにあったもの」という解説が次々に展開されていく。新築の母屋でさえ、出入口ドアなどに昔の母屋で使用していたものを使った。増田さんはこうした操作を「アドリブ」と表現した。構造補強や断熱を確実に行った後で、アドリブの操作が展開していくのだ。重要なことは、これが、空間の情報量を増していることだ。新築の母屋ではとくに形状として現れたアドリブ操作が、移築や曳家では使用する位置の問題として現れている。建物の配置の段階から細部に至るまで、あるいは新築と曳家、移築という手法を、このアドリブの操作が貫いていた。

区画整理がスタートして25年。「石神の家」を出ると、なんだかさびしそうな風景が広がっている。既存の建物とセットバックした建物が乱雑な家並みをつくり、換地を待つ空き地が散在する。きっといつかニュータウンのような整然とした街が生まれる。整理されすぎた街は、いわば情報を失ったシンメトリーの街だ。

ただ振り返ると、そこには「石神の家」が立っている。この家は、昔の酒屋や呉服屋の話、移築や曳家の話、部材を転用した話。いろいろな歴史を語りかける。そして、変わっていく石神の街に疑問を投げかけつづけるだろう。豊かな街、豊かな空間とはなんなのかと。移築という手段には、そんな力もあったのか。

座敷 → **曳家**

既存家屋のなかで、
座敷部分だけを
敷地内に曳家して残した。

曳家された座敷の土間2。左手に座敷。土間の奥に、移築された酒屋（元呉服屋）がある。

敷地内で曳家した座敷と
敷地外から移築した酒屋を、
土間でつないでいる。

曳家のプロセス

**建物を
そのまま
水平移動**

1　曳家したい場所に、基礎を新設。

2　座敷の土台の下にレールをかませ、水平移動。

3　新しい基礎の上にのせる。

写真3点、提供／増田アトリエ

母屋 → **新築**

酒屋兼住居の既存家屋を
こわす前に、
生活エリアの母屋を新築。

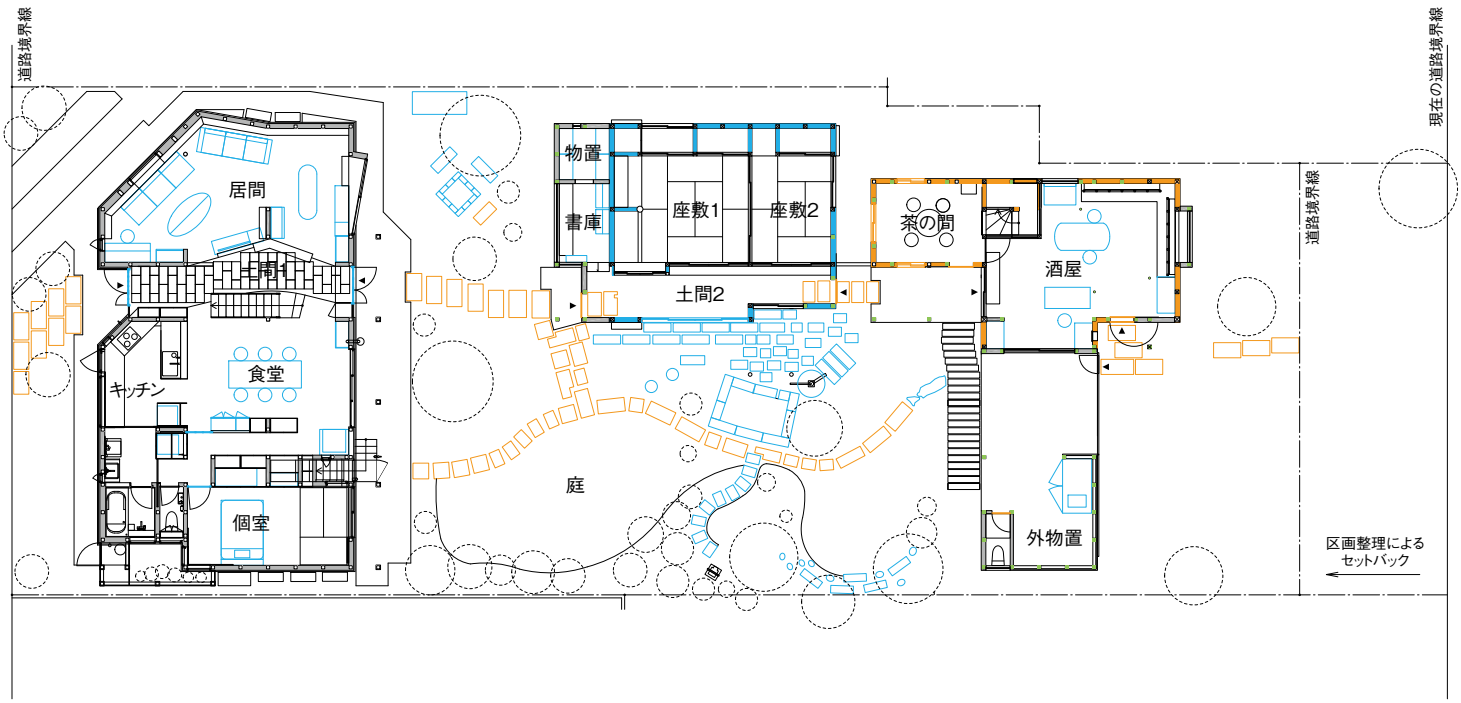
←母屋の居間と土間1。左手の階段をよけるように、土間が屈折した平面になっている。

→母屋の土間1。通り土間になっていて、北側の道路から庭に抜けることができる。

平面図

0 2 4m

1/250

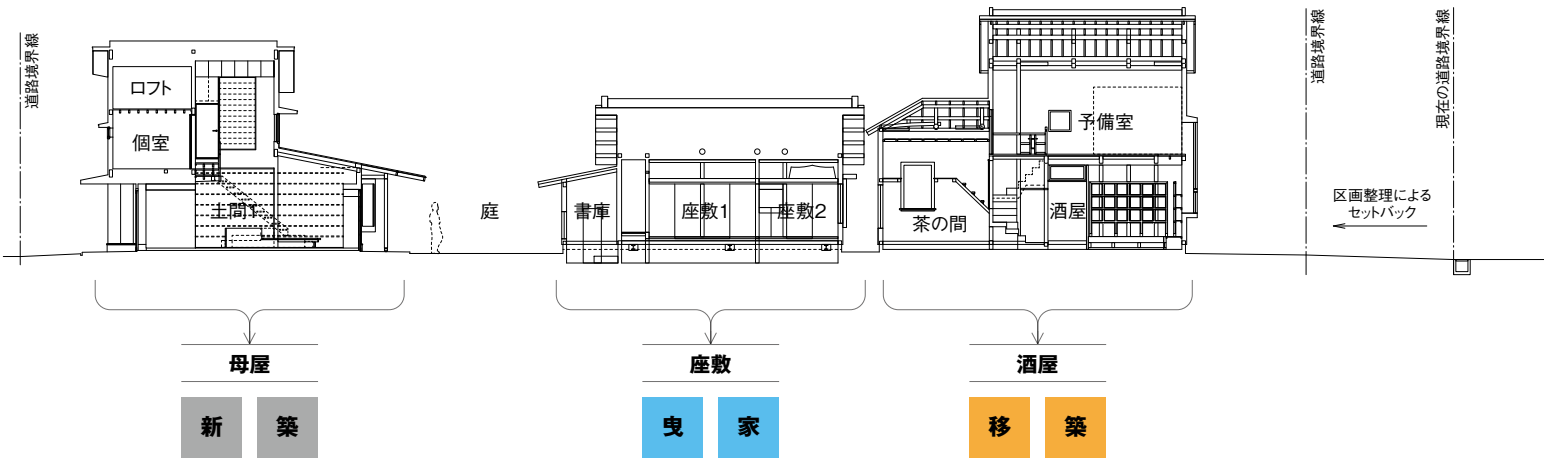


新築した部分
改修前の酒屋を曳家・再利用した部分
呉服屋を移築・再利用した部分
移築・曳家部分の新規柱

断面図

0 2 4m

1/250



写真左／前面道路側から見た酒屋。右／庭から見た座敷（右手）と母屋（左手）。

「石神の家」

建築概要	
所在地	埼玉県川口市
主要用途	住宅、店舗
家族構成	祖母+夫婦+子ども3人
設計	増田啓介+増田良子／増田アトリエ
構造設計	今井建築構造設計事務所
構造	木造
施工	三浦建設（母屋）
	分離発注（店舗、座敷）
階数	地上2階
敷地面積	688.98㎡
建築面積	273.86㎡
延床面積	325.84㎡
設計期間	2012年10月～2013年4月（母屋）
	2014年2月～9月（店舗、座敷）
工事期間	2013年8月～2014年5月（母屋）
	2014年12月～2016年7月
おもな外部仕上げ	
屋根	瓦葺き、ガルバリウム鋼板瓦棒葺き、不燃FRP防水
外壁	スギ下見板、不燃レッドシダー、ガルバリウム鋼板竪はぜ葺き小波
開口部	木製建具、アルミサッシ
おもな内部仕上げ	
母屋（居間、土間など）	
床	カラマツ t=20㎜ 蜜蠟ワックス、大谷石敷き
壁	PB t=12.5㎜ AEP
天井	ラワン合板 t=5.5㎜ オイル塗装
酒屋	
床	ハンペンレンガ あじろ敷き
壁	ラワン合板 t=4㎜ オイル塗装
天井	既存根太天井現し AEP
座敷	
床	既存の畳
壁	既存の左官壁、ラワン合板 t=4㎜ オイル塗装
天井	既存の敷目板張り

写真右上／酒屋の脇にある大戸。移築してきた呉服屋の天井の竿縁などを組み合わせてつくられている。

写真中／スペースを広くするため、階段の段数を減らしている。その結果、一段ずつの踏み面が大きくなった。もともとの段板の取りつけ跡が残っている。下／茶の間の窓。もともと洋間だったため、洋風の窓枠になっている。

写真左

増田啓介

Masuda Keisuke

ますだ・けいすけ／1973年埼玉県生まれ。97年東京藝術大学美術学部建築学科卒業。97～99年原尚建築設計事務所。2000年増田アトリエを共同設立。

写真右

増田良子

Masuda Ryoko

ますだ・りょうこ／1974年千葉県生まれ。98年東京藝術大学美術学部建築学科卒業。98～99年東映東京撮影所。99～2000年ムラヤマ。00年増田アトリエを共同設立。

おもな作品=「北本の家」（07）、「木曽呂の家」（10）、「浦和の家」（12）。

旅のバスルーム

文・スケッチ　浦 一也

ラ・シエスタ

ベトナム・ハノイ

喧騒のまっただなかに泊まる

前回に続きハノイのホテル。

高級ホテルに何日も泊まってはいられないとばかり、3日目にフレンチ・クォーターから旧市街のリーズナブルなホテルに宿を替えた。

無数の「月光仮面」(＊1)のようないでたちのバイク軍団にひき殺されそうになりながらホテルにたどり着く。

なかなかいい。デザインはあっさりしているが好ましい。ダイニングルームの食事もおいしいし、いろいろな案内も親切。スパもある。すぐ近くの安レストランや古民家展示もいい。路上では小さなプラスチックの椅子を出してきて調理や食事や散髪(!)をしている。舗石がガタガタの歩道はどこも駐車場になり、歩行者信号は消えているから決死の覚悟でバイクが激しく行き交う車道に踏み出す。心臓に悪い。その程度はホーチミン市よりすごいかもしれない。安全を求めてシクロ(＊2)に乗ったのだが、それでもスリルはある。でもこの猥雑さは香り高き街とは違ってなんとなく私を元気にしてくれるのだ。

案内された部屋はデュープレックス(メゾネット)・タイプのスイート。案内の女性はどうだと言わんばかりに説明してくれる。立体的だから絵を描くととてもおもしろいのだが、トイレやテレビは上下階2カ所にあるもののワードローブは下の階だけで、外の景色が見える窓もない。ランタンみたいなものがぶら下がっているだけ。吹抜けにまわり階段があってバゲッジを携えての上り下りは危険きわまりない。

2泊目からは頼んでルームをチェンジしてもらった。床はフローリング。バスタブはないが落ち着いた普通の部屋。小さいがじつはこのほうがよほど使いやすい。やはり「20世紀ヒルトン型平面」にはかなわないのだ。屋根が連なる景観や窓まわりはまるでパリ。

チェンジした部屋。22㎡、シャワーだけ。

ハロン湾(＊3)まで足を延ばしてみる。

奇怪な形の島が無数に海にそそり立つ夢のような景観。石灰岩台地が太古に沈降し侵食されたという。クルーズの観光船はそれらをパノラマのように見せながら滑るように進む。天気はいまいちだったが、これはこれで水墨画に入り込んだようで神秘的。ガスのなかからヌッと島が現れたりする。もちろん音もない。船ではテーブルクロスがセットされて昼食。浮き桟橋に着岸すると木造の小さな手こぎボートに分乗し、鐘乳石だらけで頭がぶつかりそうに低い洞窟を進む。海水が明るく透明で空中に浮いているように錯覚する。

市内に戻り「どこかおもしろいところはないか」とたずねると「ナイマキ」という答え。よくよくたずねると、それは週末の夜にだけ出現するという「ナイト・マーケット」のことであった! あの喧騒の道路が歩行者天国になって、深夜までビアホールか夜店のようにすっかり様相が変わるのだ。それでもなぜか時々バイクがいたが……。

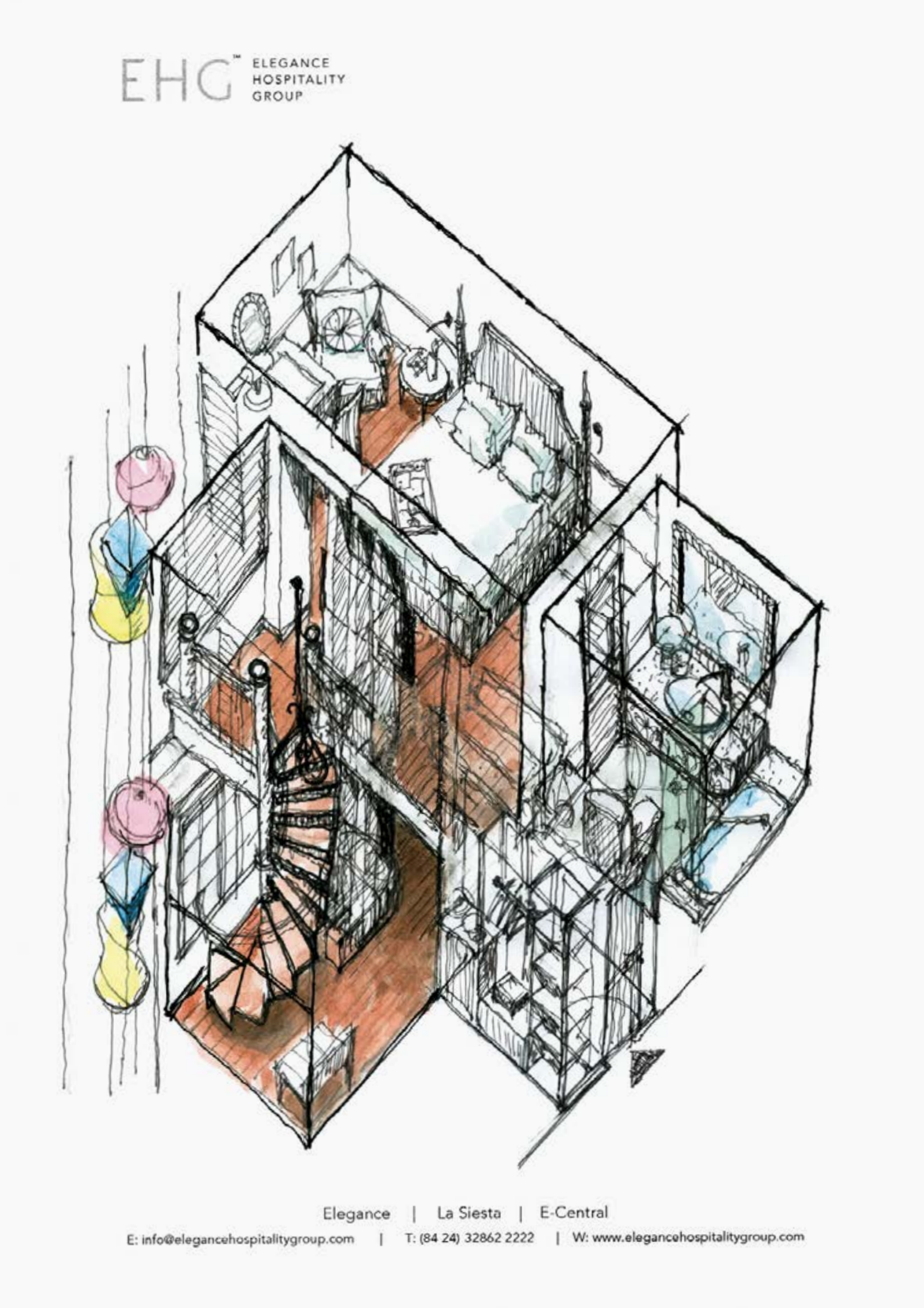
＊1　月光仮面：1958年頃にテレビ放映された冒険活劇。主人公は白の全身タイツ、ターバン、マフラー、マントに、サングラス姿でオートバイに乗って現れる。

＊2　シクロ：ベトナムやカンボジアの人力タクシー。ここでは前輪2、後輪1で客が前に座る。

＊3　ハロン湾：ベトナム北部、トンキン湾北西部にある世界遺産。大小3000余の島がある。

両開きの窓はフランス風。窓外もパリのよう。

うら・かずや／建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99〜2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。著書に『旅はゲストルーム』(東京書籍・光文社)、『測って描く旅』(彰国社)、『旅はゲストルームII』(光文社)がある。



Text & Sketch by Ura Kazuya

2層にわたるスイートは
上下の行き来が多くなる。
階下にパウダールーム。

Hanoi La Siesta Hotel & Spa	Add／94 Ma May Street, Old Quarter, Hoan Kiem District, Hanoi, VIETNAM
	Phone／+84 24 3926 3641
	URL／https://www.hanoilasiestahotel.com

1

開放的な空間は83年前の作とは思えないほどモダン。

土浦亀城邸　設計／土浦亀城

Tsuchiura Kameki × Fujimori Terunobu

垂直方向の連続性

Tsuchiura Kameki House

連載 現代住宅併走 第四十一回

文／藤森照信
Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

写真／普後 均
（土浦亀城のポートレイトを除く）

土浦亀城が1935年につくった自邸の〈土浦亀城邸〉について、本誌ではこれまで風呂場を扱ったものの、うかつにも全体は紹介していないことにこのたび気づき、取り上げる。

住宅全体の評価は、〝初期モダニズム住宅の日本における代表作〟〝当時の姿を今に伝える唯一の現存作〟〝バウハウス派の木造モダニズムの傑作〟、このくらいでいいと思うが、空間の構成についてはひとつ、あらためて考えておきたいことがある。

白い箱に大ガラスをはめることをもって旨とする世界と日本の初期モダニズム建築のなかで、土浦邸の空間構成にはほかとは異なる特徴が観察される。

まず敷地に入ると、階段を半階上って玄関に至り、玄関に入ると、また半階上がって居間。居間は南に向かっての吹抜けとなり、北側には食堂と台所が一体的に続き、ロフトとなる2階レベルには寝室が入る。

ここまでは、傾いた敷地の形状に合わせて半階を駆使してのレベル差解消法とも思われるが、問題は、居間の吹抜け空間と2階の寝室とのつなぎ方で、普通なら階段ですませればいいのに、半階上がった位置にちゃんと床を張り出し、そこにいったん上がった後、また半階上がって寝室に入る。半階上がった位置の踊り場的床の真下には、半階下がった玄関があり、階高に問題は生じない。そして寝室の吹抜け側の壁は日本風の襖で間仕切られ、開ければ寝室空間は吹抜け空間と一体化する。

初期モダニズム住宅に吹抜けとロフトはそう珍しくないが、吹抜けの中間に浮くように存在する踊り場的な床はなぜかようにつくられたのか、誰もが気になる。単調になりがちな吹抜けに変化と活気を与える土浦邸ならではの工夫だけに気になる。

昔、土浦先生にこの点をたずねると、答えは、「ダンスの音楽を奏でる場所として考えました。当時、モダンな若者のあいだではダンスがたいへん流行し、たいていのモボモガは銀座のダンスホールで生演奏にのって踊っていたのですが、私をはじめ前川（國男）さん、谷口（吉郎）さん、五井（孝夫）さんといったモダンな建築家仲間は、自分の家で踊りたいという夢があり、それを実現しました」。

実際にダンスは踊ったが、生演奏することはなく、蓄音器を置いてすませたという。

設計者の自覚としてはそのような目的であったとしても、建築史家としてはそれだけではないと言わざるをえない。なぜなら戦後のコルビュジエ派モダニズム全盛の時代にやや影の薄くなったこのバウハウス派の住宅の核となる吹抜けの居間には、玄関、食堂、踊り場、床、寝室といった場が、半階のレベル差で相互に貫入しあうような空間構成になっているが、こうした相互貫入的構成はモダンな建築家は一般的にはやらないからだ。

この問題について初めて話しあったのは、土浦邸を雑誌で取り上げて〝再評価〟の機運をつくってくれた建築ジャーナリストの植田実（まこと）さんとで、そのときはフランク・ロイド・ライトの影響という答えで一致した。

ライトは、日本につくった帝国ホテル（旧本館／一部が明治村に移設され現存）を見ればわかるように、半階分ほどの階段を多用したことで知られるが、大学を卒業してすぐにライトに学んだ土浦の自邸にはその影響が伝わっていると考えていいだろう。

では、なぜライトは半階のズラシを多用したのだろうか。

ライトが20世紀建築を切りひらいた功績の第一は、空間の連続性（流動性）にある。それまで各機能ごとに壁で仕切られていた造りをやめ、機能を超えて空間を連続させることでモダニズム空間は誕生するが、その第一歩を画したのがライトで、階段、暖炉などからなる家の中核部から部屋を横長に伸ばすことで空間の連続性を先駆的に獲得しているが、そのとき、なぜ半階ズラシは多用されたのか。

なぜ、と問うのは、ライトの影響で空間の連続性に目覚め、空間の連続性を確立するバウハウスのグロピウスやミースが、決して半階ズラシなど取り入れず、同一レベルの階の平面上だけで連続性を実現しているからだ。

なのになぜ先駆者のライトとその弟子の土浦は、半階ズラシによる空間の相互貫入などという利用上は段差だらけで不便な構成を好んで試みたのか。空間の連続性という自ら求めた大筋のなかで何をやりたかったのか。

この問いは、このたび久しぶりに土浦邸を紹介するにあたり、自らに立てた問いなのだが、たどり着いた答えは、

〝垂直方向の空間の連続性〟をねらっていたのではあるまいか。半階ズラシにより、土浦邸

現代住宅併走

Tsuchiura Kameki × Fujimori Terunobu

2

白い箱と大ガラス。

3／83年前の姿をほぼ正確に伝える。4／モダンな玄関のドア。左手には腰掛け。右下は郵便受け。5／玄関から左手の階段を半階上がって居間（主室）へ。

3

4

5

7

8

6

6／見せ場の踊り場。右手奥には食堂と台所。踊り場の右上には寝室。

7／階段からギャラリーを見る。

8／寝室。右手には襖状の仕切り。

現代住宅併走

Tsuchiura Kameki × Fujimori Terunobu

の玄関、居間、踊り場的床、寝室というように、空間は水平方向と同時に垂直方向へも連続的に続くことができる。

とすると、新たなる次の問いが派生しよう。ライトの影響、具体的にはライトがドイツで出版した自作集を見て空間の連続性に目覚めたバウハウスの面々は、空間の連続性を発展させ確立する過程で、なぜ垂直方向の連続性はやめ、水平方向の連続性だけに絞ったのか。その代表はミースであり、その代表作は「チューゲンハット邸」（1930）なのだが、答えは今後の課題にしよう。

バウハウスの空間の水平性だけに途中までは付き合いながらやめて、垂直性を加えるべく転じたのがル・コルビュジエだった。

でもコルビュジエはライトや土浦邸のように半階ズラシはとらず、斜路を多用して垂直方向への空間の動き（連続性、流動性）に取り組んでいる。

ライトのもとより帰国した土浦亀城が土浦邸のような四角の箱に大ガラスの作品をつくりはじめると、ライトは土浦にあてて、なぜコルビュジエのようなデザインをお前はするのかと難詰する手紙を書いているし、ミースがアメリカに渡って、初めてライトに会ったとき、リスペクトを込めて丁寧に挨拶すると、ライトは、顔を横に向けて無視したという。ライトは、自分に学びながら自分を超えて進む者にも競争心をむき出しにするほどの前衛魂の持ち主だった。

9

地下の白い浴室。

土浦亀城邸 Tsuchiura Kameki House

建築概要	
所在地	東京都品川区
主要用途	専用住宅
設計	土浦亀城
施工	秋山組
敷地面積	285.98㎡
建築面積	59.40㎡
延床面積	116.20㎡
階数	地下1階、地上2階
構造	木造
竣工年	1935年
図面提供	中村常子

土浦亀城

つちうら・かめき／明治30（1897）年、水戸に生まれる。東京帝国大学工学部建築学科卒業後、ライトに学び、帰国後、ライトとモダニズムの折衷的デザインを経て、純粋なモダニズムに到達する。日本のモダニズムをバウハウス派とコルビュジエ派に分けるなら、前者の代表者である。平屋の初代土浦邸の後、現土浦邸をつくり、日本における“白い箱に大ガラス”のバウハウス派モダニズム住宅を確立する。健康に恵まれ平成8（1996）年、数え年100歳で長逝されたが、すでに知人も友人も直接の縁者も亡く、藤森が葬儀主催役を務めた。

Tsuchiura Kameki

藤森照信

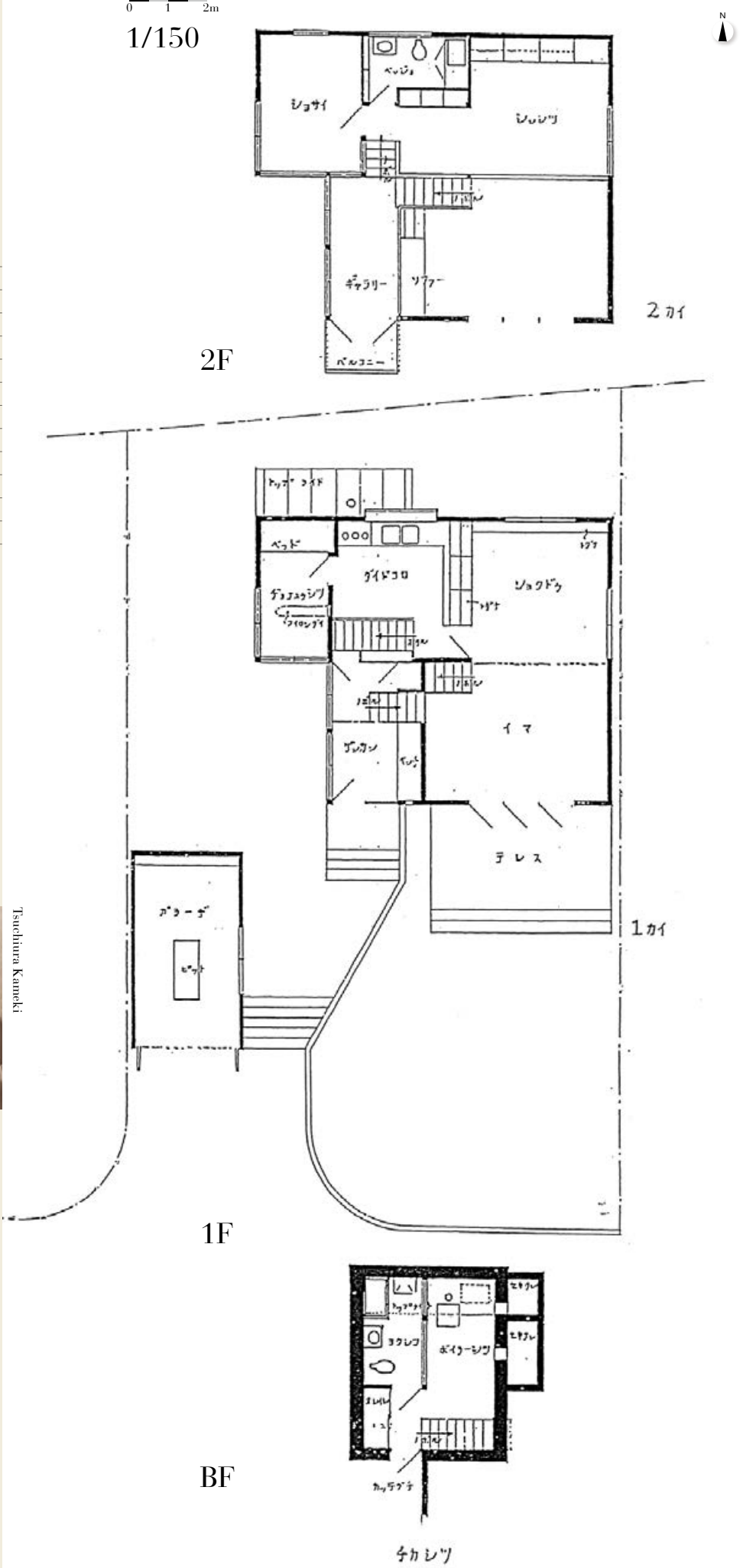
建築史家。建築家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞＝『明治の東京計画』（岩波書店）で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸（ニラ・ハウス）」（1997）で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000）で日本建築学会作品賞。

Fujimori Terunobu

竣工時平面図

0 1 2m

1/150



東京ミッドタウン日比谷

Tokyo Midtown Hibiya

日比谷公園から見た建物外観。

日比谷を活性化する新しいミッドタウン

取材・文／大山直美　写真／川辺明伸（ポートレイトを除く）

今年3月、三井不動産が日比谷に計画した、新たなランドマークタワー「東京ミッドタウン日比谷」がオープンした。

日比谷公園に面した敷地は、同社が所有していた三信ビルディングと日比谷三井ビルディングがあった跡地で、地上35階、地下4階建ての建物は11～34階がオフィスフロア、地下1～7階がレストラン、ショップ、シネマコンプレックスなど計60店舗の商業施設からなる。

東京ミッドタウンといえば2007年に六本木に誕生した複合施設名だが、三井不動産によると、今回、同社の都市型大規模複合開発を「東京ミッドタウン」ブランドとして位置付けることになり、同ブランド名を冠した新たなビルがお目見えするに至ったという。

近接する銀座や有楽町に比べると商業施設は少なく、ビジネス街のイメージが強い日比谷だが、かつては鹿鳴館があり、帝国ホテルも立ち、国賓や外交官をもてなす社交場として発展。劇場や映画館などが立ち並ぶ芸術・文化・エンターテインメントの発信地でもあった。やわらかな曲線を生かしたビルの外観は、舞踏会で社交ダンスを踊るカップルのイメージから発想したものだそうだ。土地の歴史を継承し、より人でにぎわう魅力的な街に進化させたいという開発意図を体現しているようにみえる。

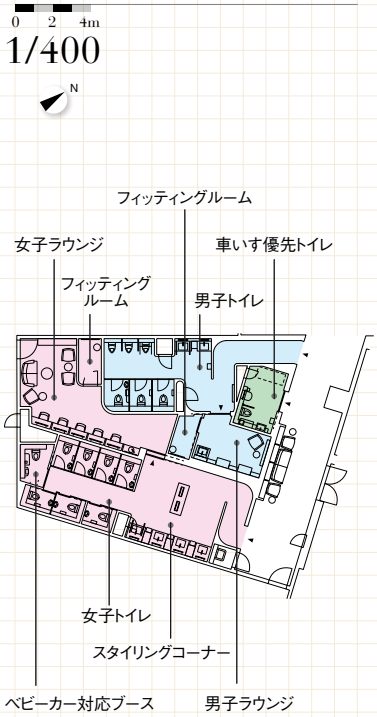
トイレを施設に訪れるきっかけにする

今回取材したのは、低層部の商業エリアのトイレ。商業施設全体の内装設計を手がけた乃村工藝社の數坂（すざか）幸生さんによれば、共用部のデザインコンセプトは「劇場空間都市」。確かに、1階から3階までが吹き抜けたアトリウムの見上げは、カーブを描いた客席が幾重にも連なるヨーロッパのオペラハウスを想起させ

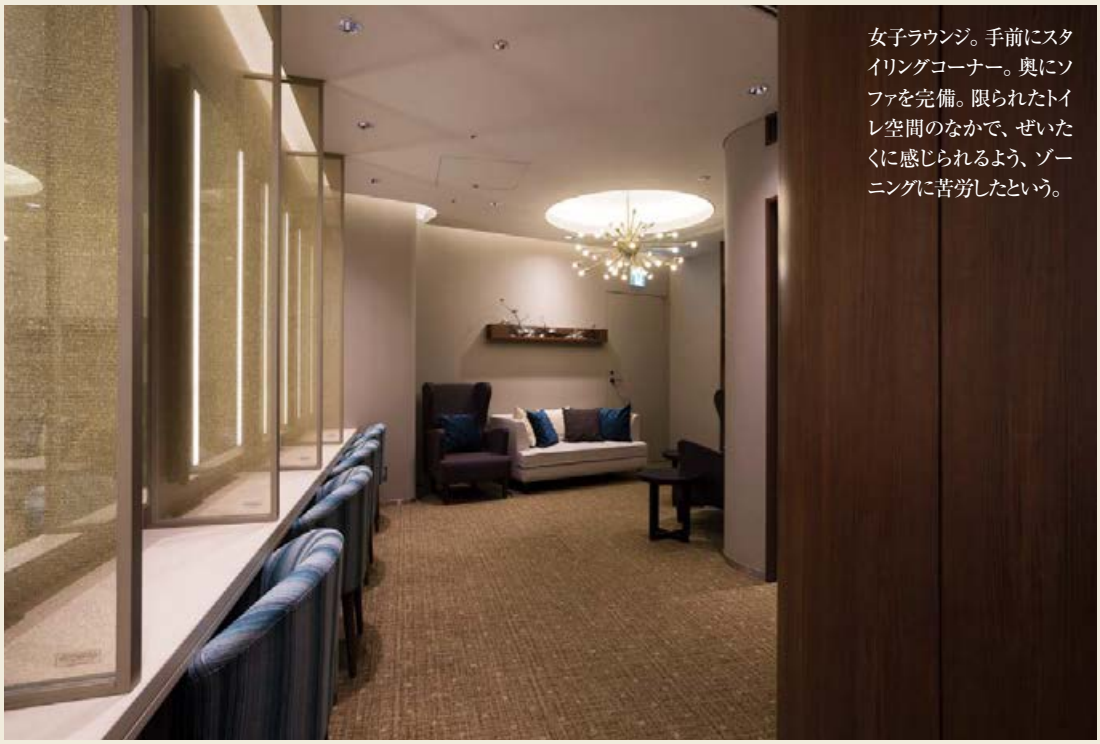
男子トイレ

写真上／洗面コーナー。奥に小便器コーナー。アンダーカウンター式洗面器を採用。中／男子ラウンジ。男性社員の意見を取り入れ、ドレッシングコーナーが充実。下／男子ラウンジ内にもフィッティングルームを設置。

東京ミッドタウン日比谷
3Fトイレ
全体平面図



女子トイレ



女子ラウンジ。手前にスタイリングコーナー。奥にソファを完備。限られたトイレ空間のなかで、ぜいたくに感じられるよう、ゾーニングに苦労したという。

写真右／独立したスタイリングコーナー。照明付きの鏡で顔まわりを明るく見せる。奥に洗面コーナー。左／ブースコーナー。手前に洗面コーナー。コンパクトな空間に、8ブースを設けた。

車いす優先トイレ

オストメイト対応。右側に多目的シート。大便器と汚物流しの周囲に、介助者との仕切りになるカーテンが設置されている。

トイレ前の空間

トイレ前の待ち合いスペース。「女性を待つ大人の男性がかっこよく見えるような場所をイメージしてデザインしました」と畑中さん。

る。郊外のショッピングモールならいざ知らず、都心でここまで共用空間が広い商業施設は珍しいだろう。

訪れた人に、ぜいたくな時間と空間のなかで特別な体験をしてもらいたいという開発側の想いは、トイレにも生かされている。三井不動産のそうした意向を受け、「トイレを単に用をたす場ではなく、施設に足を運んだり滞在時間を延ばしたりするきっかけになるレストスペースにしたいと提案しました」と語るのは、乃村工藝社の畑中千賀子さん。

2、3階のトイレには、まさにそこに行くことを目的に足を向け、長くとどまりたくなる仕掛けが満載だ。畑中さんによれば、事前に乃村工藝社内はもとより、プロジェクトにかかわる各社の社員からトイレに対する意見を聞き取り、それをデザインにつなげていったという。

まずこだわりのレストランやショップがある3階は、トイレも大人の社交場をイメージした内装で統一。特筆すべきは、男女ともトイレ空間とは別に、広いドレッシングラウンジを設けた点にある。いずれも身だしなみを整えるためのコーナーやゆったりくつろげるソファがあるうえ、女性だけでなく男性用にもフィッティングルームを完備しており、時代もついにここまできたかと驚かされる。女性用のラウンジには個別の鏡と椅子を備えたスタイリングコーナーもあり、ついつい長居してしまいそうだ。

これだけのぜいたくな空間が使えるなら、確かに、ここを使用することが目的で訪れるリピーターが増えるかもしれない。

ターゲット層を想定するとみんなが使いやすい

次に、3階に比べてカジュアルな飲食店などが多い2階のトイレは、小さな子ども連れのファミリー層向けスペースが充実。男女どちらも、ブース内にはすべてベビーチェアが備わっているのはもちろんのこと、ベビーカーごと入れる広めのブースを確保している。

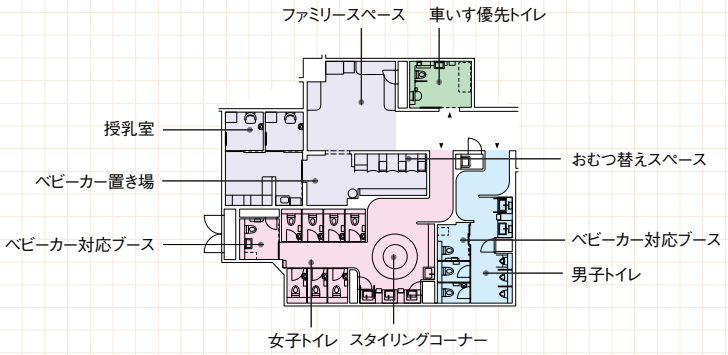
畑中さんいわく、「とくにファミリー向け限定ではありませんが、女性トイレのパウダーコーナーにはコンセント付きのカウンターを設け、中央には買い物後に荷物を整理したりするのに便利な、大きめのソファを配置しました」と、こまやかな配慮が光る。

隣接する授乳室はオープンなソファコーナーとふたつの個室を完備。別に、男性も入れるおむつ替えコーナーも用意した。さらに、授乳室の手前には広い待ち合いスペースもあり、妻が化粧直しをしているあいだ、子

女子トイレ

写真右／広々としたベビーカー対応ブース。男女トイレに1つずつ設置されている。左／洗面・パウダーコーナー。中央に大きな円形ソファ。荷物を整理したり、子どもを座らせたりと多目的に使える。

写真右／ブースコーナーより、洗面・スタイリングコーナーを見る。各ブースには、ベビーチェアを完備。



東京ミッドタウン日比谷
2Fトイレ
全体平面図

0 2 4m
1/400
N

男子トイレ

洗面コーナー。奥に小便器コーナー。ファミリー層を想定した2階は「カラー・シェイプ」がテーマ。男女とも壁や照明の彩りにこだわった。

ファミリースペース

写真上／ファミリースペース内の授乳室。個室なので、安心して使える。左／おむつ替えスペース。荷物台に使えるベンチを設置。

連れの夫がゆったり待つなどといった使い方ができそうだ。「ファミリー向けのトイレが充実した施設を見ると、トイレのデザインが子ども寄りに傾いたところが多いので、ここではもう少し大人っぽい上質さを心がけました」と畑中さん。

2、3階ともに、車いす優先トイレも設けられ、内部には介助者とのあいだを仕切るカーテンを設置。いわゆる多機能トイレを、誰でも使えるトイレと位置付けている施設が多いなか、「ここでは車いすを使用する方や障害のある方優先にしたいというのが、三井不動産さんの強い要望でした」とは敷坂さんの弁。子連れのファミリー層が頻繁に多機能トイレを使うと、肝心の車いす利用客が使いづらくなってしまうからだ。

ただし、車いす優先トイレ、ベビーカー対応ブース、授乳室、ドレッシングラウンジなど、各用途ごとにスペースを確保するとなると、大変なパズルワークを要したことは容易に想像がつく。

敷坂さんも畑中さんも、「一番苦労したのは、限られた面積のなかでどうやりくりするかでした」「ラウンジの広さの男女比をどうするかといったバランスが難しかったですね」と口を揃える。

乃村工藝社
クリエイティブ本部
デザイン2部　グループ1
グループリーダー
敷坂幸生
Suzaka Sachio

乃村工藝社
クリエイティブ本部
デザイン2部
デザイナー
畑中千賀子
Hatanaka Chikako

新たな人の流れを生み出す場となる

ちなみに、畑中さんはこのプロジェクトの基本設計まで担当後、産休・育休を経て、最近、職場復帰を果たしたそうで、「当時はまだ子どもがいなかったので想像しながら設計していましたが、ここは施設自体も通路幅が広くて買い物がしやすいし、レストルームもこれだけ充実しているので、あ、そうそう、こういうのがあってよかった、あの頃の自分はよくやったとあらためて感じます」と笑う。

東京の東側エリアに住んでいることもあって、銀座や日本橋で買い物をする機会が多いが、育休中、ベビーカーで入店しやすく、トイレや授乳室が充実した上質な商業施設が少ないことを痛感したそうだ。

子育て世代はもちろんのこと、熟年層や国内外の観光客も数多く訪れる銀座・有楽町エリア。そこに隣接する「東京ミッドタウン日比谷」は、単なる日比谷の新名所にとどまらず、新たな人の流れを生み出す役目も求められているにちがいない。快適で上質なトイレが、日比谷に人を呼び込む陰の立役者として活躍することを期待したい。

Tokyo Midtown Hibiya

アトリウムの吹抜け。

東京ミッドタウン日比谷

建築概要

所在地	東京都千代田区有楽町1-1-2
事業主	三井不動産
主要用途	事務所・店舗・文化交流施設・産業支援施設・駐車場
マスターデザインアーキテクト	ホプキンスアーキテクツなど
都市計画・基本設計・デザイン監修	日建設計
オフィス共用部環境デザイン	イリア
商業環境デザイン	乃村工藝社
実施設計・監理	KAJIMA DESIGN
施工	鹿島建設
敷地面積	10,702.32㎡
建築面積	8,652.41㎡
延床面積	189,244.95㎡
階数	地下4階、地上35階、ペントハウス1階
構造	鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造、一部CFT造
店舗数	60店舗
工期	2015年1月～2018年2月

おもなTOTO使用機器

商業エリア　2・3階

●男子トイレ／女子トイレ
壁掛フチなしトルネード式大便器　C473
ウォシュレットPS（擬音装置「音姫」付きエコリモコン）　TCF5533
アンダーカウンター式洗面器　L505
ベッセル式洗面器　LS717CM
水栓金具　TENA22FL
オートソープディスペンサー　TLK02S01J
クリーンドライ（高速両面タイプ）　TYC420W
フィッティングボード　YKA41
●男子トイレ
低リップ自動洗浄小便器　UTFU型
小便器用手すり　T112CU2
●車いす優先トイレ
フラットカウンター多機能トイレパック　XPDA型
（3F）収納式多目的シート　EWC520BRR
（2F）パブリック用折りたたみシート　EWC500RR
●ベビールーム
壁掛自動洗面器　LS800DM

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、それぞれの土地柄、
会社の性格、そして会社をリードする
人物の性格、マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

未来の安心を約束する家づくり

代表取締役 宮宇地 誠 さん

ミヤウチ建設の創業は昭和32（1957）年。創業61年目を迎えた今年の初め、社長の宮宇地誠さんはある宣言を行った。

「2025年に社長を交代する」

7年後、子息の秀樹さんにトップを引き継ぎ、世代交代することを社内外を問わず宣言したのである。宮宇地さんは今年60歳。一般社会からみると早すぎる世代交代宣言だが、そこにはミヤウチ建設が大切にする「信頼」への想いがあった。

採算度外視で工事をやり直す建売住宅

ミヤウチ建設の前身、宮宇地工務店は宮宇地さんの父で現会長の行照（ゆきてる）さんが創業。大工から会社を起こした行照さんは、起業数年後に、大阪市内から現在地・藤井寺市に出て、建売の分譲住宅の販売を始める。分譲住宅会社としては珍しい技術者出身のトップ・行照社長がにらみをきかせ、納得できない仕上がりを見つけると採算度外視で工事をやり直させるという一風変わった住宅は、次第に人々の信頼を得て、業績も順調に伸ばす。その風向きを変えたのがいわゆるバブルの崩壊だった。

やがて「土地の価格変動に左右されない」方向を目指して注文住宅へとシフト。現在、ミヤウチ建設が手がける住宅はほぼ注文住宅のみだが、この舵とりを担ったのが、2000年に社長を引き継いだ誠さんである。

営業したらみえてくるエンドユーザーの想い

父の背中を、そしてミヤウチ建設を見て育った宮宇地さんは、自然と建築の道へ。一度は関西を離れて大学の建築学科に進むが、思い直して地元に戻り、行照さんの兄弟弟子の大工のもとに通って現場を学び、一方で大阪の夜間の大学に再入学して、座学と現場での実学を両立させた。卒業後、ミヤウチ建設に入社し、工事部門、経理、さらには営業を経験する。

宮宇地さんより数年入社が早く、現在、設計・工事部門のトップとして宮宇地社長と二人三脚で会社を支える室谷哲也（むろたにてつや）さんにも話を聞いたところ「私も新卒で、技術職で入社したのに社長（現会長）の意向で最初は営業をやらされました。『営業したらみえてくる』と。誠社長もほかの社員と同じようにしごかれた」と当時を振り返る。仕事のノウハウや技術的なことより、まずはエンドユーザーとじかに接して、その希望や想いを肌で感じとれということだったのかもしれない。

私たちが存続することが一番の安心感につながる

迷ったら会社のことは考えなくていいから、お客さんが喜ぶだろうと思うほうを選べ。これは創業者・行照さんの言葉。この厳格な姿勢は現在も引き継がれる。

「優先順位をつければ、まず安全・安心、次に快適・便利、最後にデザイン。最先端のデザインや凝った意匠にこだわる人にはうちは合わない」

住宅の構造は在来軸組。耐震性や断熱性などの各種仕様は、時代に合わせて最適と思われるものを採用するが、ことさらにそれをウリにはしない。昨今話題のZEH（ゼロエネルギーハウス）も横目で見ながら、取り入れるべきは柔軟に採用する。設備機器もしかり。ミヤウチ建設の家の最大の特徴は、「つくるモノ」ではなく、「つくるヒト」にある。

ミヤウチ建設の施工範囲は車で1時間半以内。スタッフは地元・藤井寺周辺の出身者が多い。完全な地元密着型である。不動産業や賃貸経営、リフォームなど別会社形式にした複数部門を抱えるが、社員の多くが部門を超えて「なんでもやる」のがミヤウチの流儀。お客さんと一緒に土地探しから始めたスタッフは、家づくりもそのまま担当する。出来上がって、困ったこと

写真右／2階寝室。右側にウォークインクロゼット。左／1階LDK。庭に面した大開口で明るい。

Miyauchi Kensetsu

ミヤウチ建設

●会社名
ミヤウチ建設㈱
●本社所在地
大阪府藤井寺市御舟町1-63
●電話
072-939-3146
●代表取締役
宮宇地 誠
●会社創業
1957年
●従業員数
16名
●事業内容
分譲住宅、注文住宅、
賃貸住宅、仲介、リフォームなど
●売上高
7億3,000万円(2017年11月期)
●URL
http://miyauchi2345.com
●TOTO使用機器
・キッチン ミッテ
・浴室 サザナ
・トイレ GG-J1
・洗面所 オクターブ

新築住宅の1階LDK。キッチンカウンター前に、社長の宮宇地誠さん。

家をつくったら、20年でも30年でも見守っていく責任があります。

1階キッチン。白で統一され、広く感じられる。

1階浴室。清掃性にすぐれた「サザナ」シリーズを採用。

玄関ホール脇の1階トイレ。コンパクトな洗面器を完備。

があると、やはりそのスタッフが駆けつける。スタッフにとっても地元だから、間違っても手を抜いたり、いい加減なことをしたりはできない。

「瑕疵(かし)担保責任で10年といわれますが、10年を過ぎたら雨がもっていいわけではありません。家をつくったわれわれにはその後20年でも30年でも見守っていく責任があります。お客さんにとって何が一番の安心かを考えると、そういう私たちミヤウチ建設がずっと存続していることだと思うのです」

その想いの表れが、早すぎる世代交代宣言。ミヤウチ建設はまだまだ続く、だから家を建てた後も任せてください。世代交代宣言は、将来に向けての安心宣言なのである。ミヤウチ建設の堅実な家づくりは、未来の安心・安全まで約束している。

取材・文／市川幹朗　写真／山下恒徳

みやうち・まこと／1958年大阪府生まれ。77年に日本大学工学部建築学科に入学。将来は地元で仕事がしたいと1年半で中退し、大阪工業大学工学部第II部(夜間)に入学。日中は大阪市内の大工のもとで修行をしていた。83年に大学卒業後、先代である父が経営するミヤウチ建設に入社。2000年に代表取締役に就任。地元の藤井寺市周辺を中心に、年間25棟ほどを手がけている。

Miyauchi Makoto

New Product Story / Interview with Oba Takashi and Kawahara Kenichi

新商品開発物語

システムバスルーム「SYNLA（シンラ）」

2018年8月発売

お風呂にも、「ファーストクラス」ができました。

リラックス&リフレッシュ……お風呂の中心である浴槽を、どこまで快適にできるのか。TOTOのシステムバスルームSYNLAがリニューアル。人間工学の粋を集めた「ファーストクラス浴槽」と、心地よさをきわめた「肩楽湯」「腰楽湯」の魅力について、開発者のふたりがご案内いたします。

取材・文／村上浩平　写真／山下恒徳

目指したのは お風呂の王道 「リラックス&リフレッシュ」

——新製品のコンセプト「リラックス&リフレッシュ」はどのような経緯で生まれたのでしょう。

大庭　お風呂で「リラックス」、あたりまえですか(笑)。じつはアンケート（＊）でお風呂に対する要望の上位に上がってくるのは「掃除のしやすさ」や「保温性」など、機能的な部分です。そのあたりはTOTOもずっと注力しています。しかし、リフォーム需要の中心となる50代、60代に絞ると、「リラックス&リフレッシュ」のスコアがぐっと上がってくるのです。

——なるほど。

大庭　ターゲットにふさわしい高級グレードのSYNLA。であればこそ、清掃性は保持しつつも、お風呂に本来求められる快適さ、気持ちよさ、いわば王道をとことん追求してみようということになりました。

——ヒントになったのは、海外で評判の「フローテーションタブ」だとか。

大庭　昨年、住設器具の見本市「ISH」でTOTOが発表した大型浴槽で、あたかも横になって浮遊しているような感覚が味わえるものです。

川原　中国やドバイ、ヨーロッパなどの富裕層に人気ですね。

——それをシステムバスにもち込んだ、と。

大庭　フローテーションタブの浴槽は、仰向けに寝たときの身体に沿うような形状になっています。身体を支える支点がたくさんできるため、各部にかかる荷重が軽減で

TOTO㈱
浴室事業部
浴室開発部
浴室商品開発グループ

大庭崇嗣

Oba Takashi

おおば・たかし／1979年静岡県生まれ。2005年に千葉大学大学院自然科学研究科建築専攻を修了後、TOTOバスクリエイトに入社。以降、浴室開発部でシステムバスルームの商品開発に従事。おもに戸建て向け商品を担当。新商品では商品全体の企画に携わっている。

TOTO㈱
浴室事業部
浴室開発部
浴室機器開発グループ

川原健一

Kawahara Kenichi

かわはら・けんいち／1970年福岡県生まれ。96年に岡山大学大学院工学研究科機械工学専攻を修了後、TOTOに入社し給湯機事業部に配属。2004年より現職。浴室機器商品の開発を専門に、新商品では「腰楽湯」「肩楽湯」の開発を担当している。

きるのです。その「支点を増やす」という考え方を、システムバスにもち込んだのが「ファーストクラス浴槽」です。

——支点を増やすとは、どういうことですか。

大庭 ご自宅でお風呂に入ったときのことを、思い出してみてください。従来の浴槽だと、背中の一部とお尻、足の3点で身体を支えています。

——そうですね。

大庭 「ファーストクラス浴槽」は、背もたれの上にヘッドレストが付き、頭も支えます。支点が4つに増える。安定することで、その分身体が軽くなり、お湯の中でふわふわ浮くような感覚になるんですね。また、ヘッドレストに頭をつけたときに背中が浴槽から離れないよう、身体のラインに沿った浴槽の形状にこだわりました。その分、背中の接地面積が広く、ゆったり身体をホールドしてくれる。まさに「ファーストクラスの入り心地」といえるでしょう。

「肩楽湯＋腰楽湯」の圧倒的な気持ちよさ

——今回のSYNLAには、新しい仕組みの噴流技術が採用されたそうですね。

川原 先ほどの「ファーストクラス浴槽」についている、「肩楽湯」と「腰楽湯」というTOTO独自のメカニズムです。

——豪華浴槽の仕様ということですね。

大庭 ご家庭でジェットバスを使いたいというお客さまの声が多かった（＊）ので、思い切って標準装備にしようと。

川原 毎分約135リットルというたっぷ

りの流量と、気泡を含まないやわらかな水の流れが、ふたつの「楽湯」の特長です。肩には、ヘッドレストの下のワイドなスリットから、お湯が切れ目なく広がっていって、包み込まれるような心地よさが生まれます。左右の腰にはまるで手の動きのようなランダムでやわらかい刺激が注がれます。

大庭　社内モニターからも絶賛されたのですが、両方を同時に使うことで、圧倒的な解放感が生まれるのです。お湯は循環させて使うので、節水性も従来どおり。

――「肩楽湯」は今回新開発された技術ですね。

川原　技術的にとても大変でした。ＬＥＤ照明を組み込んだ薄いヘッドレスト、その中のカーブしたスリットから、大量かつ切れ目のないワイドな流れをつくり出さなければなりません。コンピュータによるシミュレーションを何度も繰り返し、素材や製造工程に至るまで新しい方法を取り入れることで、ようやく完成しました。

――「腰楽湯」にはＴＯＴＯの特許技術が使われているそうですね。

川原　フローテーションタブにも使用されている「ハイドロハンズ」です。

――「水の手」というような意味ですか。

大庭　まるで手の動きのような、やわらかくて変幻自在の水流をつくり出したいという想いが込められています。

川原　従来のジェットバスは気泡を含むため、長時間浴びるとかゆくなるとおっしゃる方がいます。そこで流れ込むお湯が、特殊な形状のノズルによって気泡を含まない噴流となって、やわらかいランダムな動きをしながら旋回するようにしたのです。長時間浴びても肌にやさしく、音も従来のものに比べてぐっと静かになりました。

ジェットポンプによって同時稼動を実現

――肩と腰、同時に刺激できるのがいいですね。

川原　ここが今回、一番苦労した部分ですね。ふたつの水流をきちんと動かすためには、通常それぞれにポンプが必要です。広い浴室なら、それも可能ですが、システムバスだとそうはいきません。浴槽の内壁と外壁（防水パン）のあいだに納めるために、小型のポンプをひとつ設置するのがやっとです。

――そうですね。

川原　ポンプひとつだと、たっぷりの水量を2カ所から同時に出すのは難しい。さんざん検討した結果たどり着いたのが「ジェットポンプ」でした。

大庭　以前、ＴＯＴＯがパブリック向け大便器に採用した技術です。

川原　少ない量の水を勢いよく噴出させることで、まわりから水を巻き込み、大量に流すという仕組みです。ひとつのポンプで、ふたつの出口から同時に勢いよくお湯を吐き出す。「腰楽湯」を注ぐ一方で、大量のお湯を肩口まで引き上げて流せるようにしました。

大庭　もちろん肩と腰、別々に刺激することもできます。

これからも王道を そして安全を

――今後の展望をお聞かせいただけますか。

大庭　お風呂に関しては、清掃性に対するお客さまのニーズが一番高いので、さらに進化させていかなければなりません。

　ＳＹＮＬＡにとっては、これからも「リラックス&リフレッシュ」。どれだけ気持ちいいお風呂体験ができるかが最も大切です。ひきつづき王道を追求していきたいと思います。

川原　今後高齢化が進むなか、安心・安全ということがより重要視されると思うんです。今回の製品でも、循環水の吸入口に髪の毛などが吸い込まれないよう、徹底した安全対策を施しましたが、ＩｏＴやいろんなセンサー技術を使って、もっと安全に、安心して入れる浴室を追求したい。それが今後取り組んでいく課題……いや、むしろ急務というべきでしょうね。

商品情報

*イメージ写真

システムバスルーム「SYNLA」
1616サイズ

105万～217万円（希望小売価格）

カタログのご請求

詳細は「システムバスルーム シンラ No. 450」をご覧ください。カタログをご希望の方は、本誌に同封の「TOTO通信2018年夏号 アンケート用紙」にご記入のうえ、ファクスまたはWEBにてお申し込みください。

FAX
→093-571-0999

お問い合わせ

商品の技術的なご質問は、技術相談室ナビダイヤルまでお問い合わせください。

ナビダイヤル
→0570-01-1010

新商品の3つの技術とその効果

ポイント 3

大流量を実現する

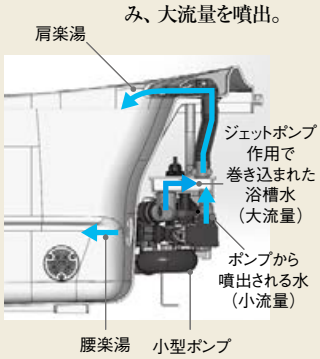
「ジェットポンプ」

切れ目のないワイドな水流

肩楽湯は裾広がりの途切れない湯で、肩全体を包む。

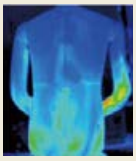
大流量をつくる仕組み

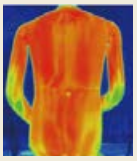
少量のポンプ水で周囲の浴槽水を巻き込み、大流量を噴出。

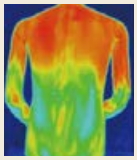


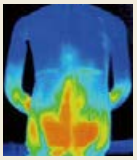
あたたまり効果

楽湯の使用有無を比較。あたたまり方の違いは明らか。


〈通常の全身浴〉


〈肩楽湯＋腰楽湯を使用〉


〈肩楽湯を使用〉


〈腰楽湯を使用〉

ポイント 2

手の動きのような

「腰楽湯（ハイドロハンズ）」

人の手に近い水流

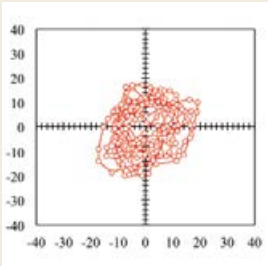
手の動きのように、やわらかくて変幻自在な水流を噴出する。

＊イメージ画像

ランダムな水流の仕組み

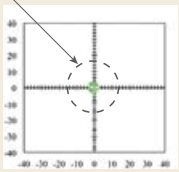
↓特殊な形状のノズルで、ランダムに旋回する水流を実現。

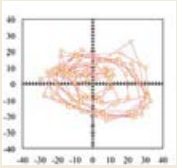
↓刺激位置の変化。ハイドロハンズは手に似た動き。



〈ハイドロハンズ〉

一点に集中


〈一般的なジェットバス〉


〈手のマッサージ〉

ポイント 1

身体を支える

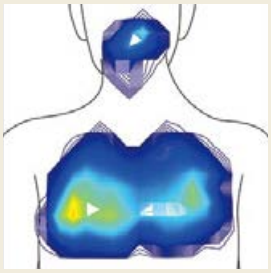
「ファーストクラス浴槽」

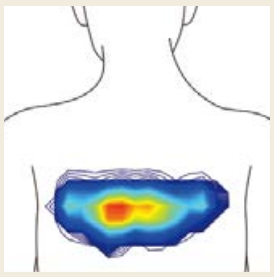
4点で支える仕組み

ヘッドレストの追加で、身体にかかる力が小さい。

背中にかかる力を分散

浴槽形状の工夫で接地面積が拡大し、圧力を分散。


〈ファーストクラス浴槽〉


〈従来の浴槽〉

New Product Story
Interview with Oba Takashi and Kawahara Kenichi

＊浴室リフォーム実施者の「購買行動」と「購買心理」調査（2015年、TOTO調べ）

ちのかたち

建築的思考のプロトタイプとその応用

藤村龍至氏はこれまで、「ジャンプしない」「枝分かれしない」「後戻りしない」という
シンプルなルールで設計を行う「超線形設計プロセス」を展開してきました。
近年では、住民参加型のシティマネジメントにも積極的に関与し、建築・都市といった枠組みを超えた活動を続けています。
本展では、スケールの大小にかかわらず、膨大な情報を集約しながら、
プロジェクトごとに最適な解を導き出す藤村氏の設計のプロセスに着目し、最新作や新たな取り組みを交えて紹介します。

©太田拓実

すばる保育園（2018年、福岡県）

保育園での教育の可能性を引き出すため生み出されたコンクリートの連続体。構造最適化設計によって導かれた自由曲面の屋根が、周囲の山並みと呼応する。

設計：藤村龍至／RFA +林田俊二／CFA

©太田拓実

OM TERRACE（2017年、埼玉県）

大宮駅前の再開発用地に計画された小さな公共施設。6回の公開ミーティングを経て、開かれた屋上テラスを提案し、実現した。現在は運営にも携わる。

ちのかたち
建築的思考のプロトタイプとその応用

文／藤村龍至（建築家）

建築を人より遅く学びはじめた私は、設計を少し自覚的に学ぶ必要があり、人が設計している様子を観察するようになりました。やがて設計とは、今知っていることをすばやく「かたち」にすること（プロトタイピング）と、かたちにしたものを「ことば」にして新しい知識にすること（フィードバック）を繰り返すことだと学びました。

その経験はまず設計を初心者に教えるときに役立ち、次に他者とのコラボレーションやインボルブメントなど、設計を学ばなかった人と設計をしなければならないときに役立ちました。作業の履歴を一つひとつ保存し、ひとつの面に並べることは、歴史から注意深く学ぶ人が、現在を的確にとらえ未来を展望しやすくなるのと同じように、設計をより深くすることも発見しました。

かつてクリストファー・アレグザンダーは『かたちの合成に関するノート』で、設計を「かたちとコンテクストのミスフィットを取り除くこと」だと定義しました。ただ現代において私たちを取り巻く問題は、コンテクストが流動的で、読めない状況が訪れたときにどうすればよいか、ということです。周辺を調査する、歴史を参照するなど、より確かな解に近づくためのいくつかある方法のひとつとして考えられるのは「3人寄れば文殊の知恵」＝より多くの知恵を集めること、です。

平凡に映る意見の集合も、十分に大きな集合であればより確かな解を得るだけでなく、ひとりの天才を軽く超えていくような、創造的な解を得る可能性も開かれます。他方で建築が今、デモクラシーとポピュリズムのあいだで揺れているように、世論や市場の暴力に

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY · MA

次回予告

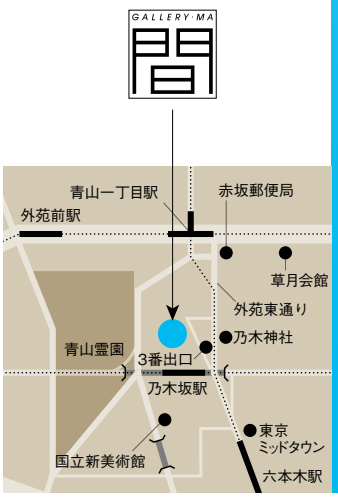
田根 剛
Archaeology of the Future
未来の記憶
Search & Research

建築とは過去から未来へ継承するものであると考える田根剛（たね・つよし）氏は、場所に残された記憶を丹念に掘り起こすことで、その場所にしか存在しえない建築をつくり出しています。本展は、東京オペラシティアートギャラリーとの2館連携企画となり、両館を通して田根氏の思想とその実践をご紹介します。

会期
10月18日（木）～12月23日（日・祝）
講演会
10月20日（土）／イイノホール

TOTO ギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03（3402）1010
ファクス／03（3423）4085
開館時間／11：00～18：00
休館日／月曜日・祝日、
夏期休暇8月11日（土）～8月15日（水）
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分



TOTO GALLERY MA

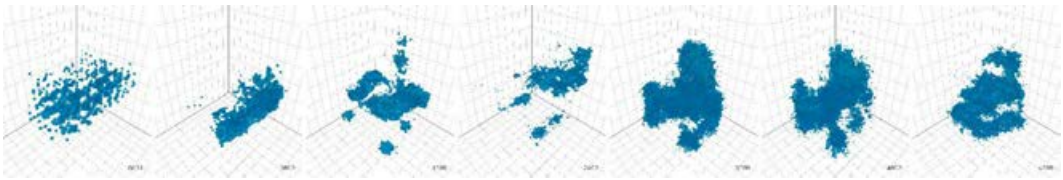
https://jp.toto.com/gallerma

会期／2018年7月31日（火）～9月30日（日）

藤村龍至
Fujimura Ryuji

©新津保建秀

ふじむら・りゅうじ／1976年東京都生まれ。2000年東京工業大学工学部社会工学科卒業。02年同大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。08年同大学大学院博士課程単位取得退学。05年より藤村龍至建築設計事務所（現RFA）主宰。10年より東洋大学専任講師。16年より東京藝術大学准教授。
おもな建築作品に「OM TERRACE」（17）、「すばる保育園」（18）、「つるがしま中央交流センター」（18）。おもな著書に『批判的工学主義の建築』（14年、NTT出版）、『プロトタイピング－模型とつぶやき』（14年、LIXIL出版）。近年は建築設計やその教育、批評に加え、超高齢化する郊外ニュータウンや老朽化した中心市街地の再生、日本列島の将来像の提言など、広く社会に開かれたプロジェクトも展開している。



The Deep Learning Chair

検索で得られた画像を素材に、深層学習によって形態を生成し椅子をデザインする試み。
協力：堀川淳一郎

Information

藤村龍至講演会	● 日時	2018年8月9日（木） 18：30～20：30
	● 会場	イイノホール（東京都千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング4F）
	● 定員	500名、参加無料
	● 参加方法	事前申し込み制。TOTOギャラリー・間ウェブサイトよりお申し込みください。
	● 申し込み期間	7月17日（火）まで

抗い、より創造的で、普遍的な解を導くことができるのかどうかは、建築にとって大きく、また困難な問いでありつづけています。

設計とは本質的に孤独であり、ひとりで考えればよいのだと開き直ることもできます。しかし私たち建築家は今、AI（人工知能）の技術が進化し、より多くのデータを直接扱うことができるようになった社会で、多様性を認め、寛容な社会の実現を信じて、より多くの知恵が集まれば集まるほどよりよいものができる、と言いきることに挑戦するべきではないでしょうか。

本展覧会では、建築を知識と形態の創造的な関係＝「ちのかたち」としてとらえ、設計作業のあらゆる断面を建築的思考のプロトタイプとして等価に扱うことを試みます。設計の履歴を可視化することで、その時々での判断を積み重ねるだけでなく、あるプロジェクトで学んだことを次のプロジェクトに応用するというように、生み出す建築をより深く、新しいものへと進化させることができます。そしてその作業をより多くの人で行い、時に機械による計算を伴うことで、建築的な思考のパターンを組み合わせ、より多くの人でよりよいものを生み出すことを目指す、集合的な知をかたちづくる方法論へと発展させることで、建築を社会のさまざまな課題解決に向けた、創造的な知のツールとして再定義したいと思います。

News File

TOTOの最新情報

TOTO News 4

「ウォシュレット」が世界No.1ブランドに認定されました

世界No.1ブランドの認定証。

ウォシュレットの販売数量が、2016年の温水洗浄便座カテゴリーにおいて、世界No.1ブランドであると認定されました。認定したのは、国際市場調査のリーディングカンパニーであるユーロモニター(*1)です。
これは、ユーロモニターが温水洗浄便座の2016年世界市場で87%を占める6カ国(*2)において実施した、市場調査(*3)に基づくものです。
TOTOは「日本のきれいなトイレ文化」の代表商品である、温水洗浄便座のグローバルなトップメーカーとして、世界のお客さまに「ウォシュレット」を愛用していただくために努めてまいります。

*1 正式名称は「Euromonitor International Ltd.」。本部はイギリス・ロンドン。
*2 日本、中国、韓国、台湾、アメリカ、ドイツ。
*3 2017年12月～18年2月調べ。

TOTO News 3

TOTOが「なでしこ銘柄」に4年連続で選定されました

TOTOは、経済産業省が東京証券取引所と共同で選定する「なでしこ銘柄」に、4年連続で選定されました。これは女性が働きつづけるための環境整備を含め、女性人材の活用を積極的に進めている企業を選定するもので、2017年度で6回目を迎えました。
ワークライフバランスと女性の活躍を推進し、その相乗効果を新たな価値創造につなげている点や、部門ごとに女性管理職の登用目標を設定し、育成を促進している点などが評価されました。
今後も、多様で強い人財(*)の育成と、企業理念のひとつである「一人ひとりの個性を尊重し、いきいきとした職場」の実現を目指してまいります。

*TOTOでは、人材は会社の将来を担う貴重な財産であるため「人財」という表現を使用しています。

「なでしこ銘柄」のロゴマーク。

TOTOギャラリー・間で「トラフ展」開催時の展示物。

©大木大輔

TOTO News 2

「ネオレスト NX」など3商品が『レッドドット・デザイン賞』を受賞しました

ウォシュレット(*)一体形便器「ネオレスト NX」、台付シングル混合水栓「GSシリーズ」「GAシリーズ」の3商品が、デザイン界で世界的に権威のある『レッドドット・デザイン賞2018』を受賞しました。
「ネオレスト NX」は、3月に受賞した『iFデザイン賞2018』に続くダブル受賞となります。TOTOは機能とデザインの融合を目指して“ものづくり”を行い、今回の3商品もその成果が評価されました。

*「ウォシュレット」はTOTOの登録商標です。

「ネオレスト NX」

受賞した2賞のロゴマーク。

TOTO News 1

ギャラリー・間 北九州巡回展「トラフ展 インサイド・アウト」を開催します

TOTOギャラリー・間で2016年に開催された「トラフ展 インサイド・アウト」を、TOTOミュージアムにて、北九州巡回展として開催いたします。
会場では、トラフがこれまでに手がけてきた作品から、現在進行中のプロジェクトまで、その過程で生み出された思考の断片をフラットに並べて、風景のようなものをつくり出します。クリエーションの現場に入り込むライブ感を、体験していただける展覧会です。

TOTOギャラリー・間
北九州巡回展
「トラフ展 インサイド・アウト」

出展作家	トラフ建築設計事務所
会期	2018年8月21日(火) ～12月23日(日)
休館日	月曜日
場所	TOTOミュージアム (北九州市小倉北区中島2-1-1)
WEB	https://jp.toto.com/museum

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

https://jp.toto.com/publishing

TOTO出版のお知らせ

Book 2

『ちのかたち　建築的思考のプロトタイプとその応用』

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

建築を知識と形態の創造的な関係=「ちのかたち」としてとらえ、設計作業のあらゆる断面を建築的思考のプロトタイプとして観察し、実践してきた建築家・藤村龍至氏。本書は、AI（人工知能）がより多くのデータを扱うようになった今日の社会で、多様性を認め、寛容な社会の実現のために、積極的な知のツールとして建築を再定義しようとする藤村氏の最新の建築作品・論考を収録した1冊です。

著者	藤村龍至
定価	2,900円+税（予価）
体裁	128×188㎜、ソフトカバー、456ページ（予定）
発行日	8月（予定）

＊表紙は変更の可能性あり

Book 1

TOTO建築叢書10『縁シンポジウム講演録』（仮）

TOTO建築叢書シリーズの記念すべき第10巻目。本書は2018年2月に開催されたシンポジウム「en［縁］アート・オブ・ネクサス、その先へ」（TOTOギャラリー・間主催）の内容をまとめたもの。今日的状況を歴史的、社会的に俯瞰したとき、向かう先に建築および建築家がどのようにかかわり、貢献していけるのか。今後期待される役割について世代を超えて討論された貴重な記録です。

著者	槇文彦、山名善之、塚本由晴
定価	1,500円+税（予価）
体裁	四六判、ソフトカバー、210ページ（予定）
発行日	9月（予定）

＊表紙は変更の可能性あり

セラトレーディングのお知らせ

ドイツ・Duravit 社の手洗器「LUV」シリーズを発売しました

セラトレーディングでは、ドイツ・Duravit 社の手洗器「LUV（ルフ）」シリーズを発売しました。話題のデンマーク出身デザイナー、セシリエ・マンツが手がけており、北欧のピュアリズムとタイムレスな優雅さを兼ね備えています。やさしい楕円のフォルムと薄くシャープなリムが特長で、水栓は水じまいのよいインセットタイプ。光沢のあるホワイトと、マットな質感のニュアンスカラー3色の、全4色をご用意しております。この機会に北欧スタイルの水まわりを検討してみてはいかがでしょうか。

当商品を掲載した「セラトレーディング総合カタログ2018」は、ウェブサイトまたはファクスにてご請求ください。
WEB／https://www.cera.co.jp
FAX／03-3402-7185

「LUV」シリーズ
手洗器
DV038142-00
（ホワイト）
希望小売価格：
¥98,000（税別）

Information

『TOTO通信』定期購読をご希望の建築家をご紹介ください。

お申し込みはTOTO通信データ管理室まで

tel 093（513）6234
e-mail toto_tsushin@jlink-net.com

＊法人あての送付となります。

Bookshop TOTO

- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
- 電話／03（3402）1525
- 定休日／日曜日・月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・夏期休暇・年末年始

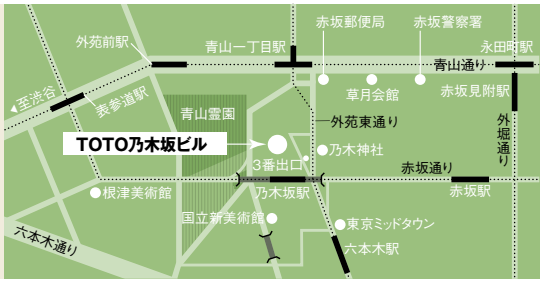
TOTO出版

- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
- 電話／03（3402）7138
- ファクス／03（3402）7187

全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。

セラトレーディング

- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル
- 電話／03(3796)6151、03(3402)7134（東京ショールーム）
- ファクス／03(3402)7185
- 定休日／月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始



アクセス／●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2019年1月上旬発行の予定です。

TOTO通信 2018年 夏号

TOTO通信 2018年 夏号 第62巻・第3号 通巻519号
発行日：2018年7月1日 発行所：TOTO株式会社 メディア推進部
〒105-8305 東京都港区海岸1-2-20汐留ビルディング24F TEL.03(6836)2172

SYSTEM BATHROOM シンラ

SYNLA

上質で心休まる
穏やかな時間をすごす

［お問い合わせ］
TOTO技術相談室　ナビダイヤル：0570-01-1010
受付時間：平日 9:00～18:00　土曜日 9:00～17:00
（日・祝・夏期休暇・年末年始を除く）
専門家コーナー「COM-ET」　www.com-et.com

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、なたねに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.（封筒の宛て名ラベル右上に記載）も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内　TOTO通信データ管理室　TEL.093(513)6234　FAX.093(571)0999
＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト（https://jp.toto.com）をご覧ください。

8232